Unser HERR lebt

主は、生きておられる vol. 7 | 定価100円（本体95円）

主は、生きておられる

Unser HERR lebt



信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。（ヘブル12･2）

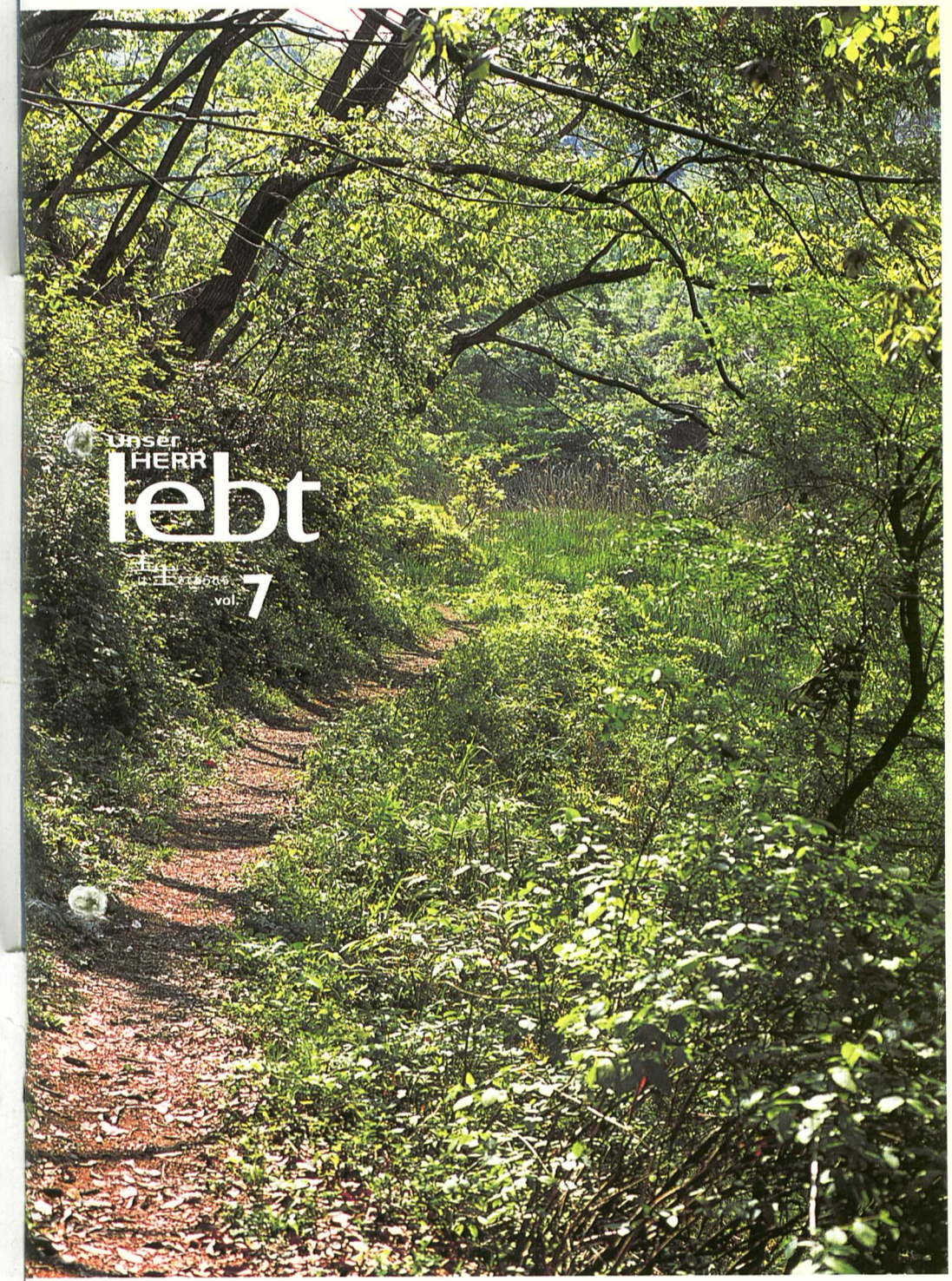
vol. 7

graph magazine

2004

INDEX

巻頭メッセージ	04	「救いの確信」／ゴットホルド・ベック
12人の証し	14	死の彼方に輝く明るい希望／高橋艶子
	18	試練のきわみで真の幸せを実感しました／瀬島志郎
	20	ああ驚くべきイエスの愛よ／井上桃子
	24	信仰はいのちの問題／井上浩一
	28	すべてのことは備えられたものでした／池田潤太
	30	虚しさからの解放／山本京亮
	30	強いと思っていた私は本当は弱い者でした／滝朋子
	32	イエス様、ついて行かせてください！／小池正悟
	35	イエス様、大好き！／小池久美子
	38	イエス様と共に歩む喜びと平安／吉田信夫
	40	イエス様こそ、幸せに至る道／長岡慧
	42	主は生きておられる／片桐喜央
メッセージ	44	離婚、再婚について／ゴットホルド・ベック
3人のメッセージ	50	平安を与えます／染野茂夫
	56	定年後の祝福された生活／辻田浩康
	62	「イエス様の愛を知ることが必要です」／辻陽一郎
	68	メッセージ当番表 2004年 6月～9月
	72	よろこびの集い予定表
	73	インフォメーション・ボックス
連載メッセージ	74	［モーセの十戒］第7回 神の聖なる戒め／ゴットホルド・ベック
各地の集会から	84	こちら伊那集会で～す
	86	あおぞらひろば
	90	結婚・葬儀の報告
ケーキ	91	チョコレート ブラウニー
	94	キリスト集会へのご案内
	96	本の紹介
	98	全国の集会住所録



救いの確信について

ゴットホルド・ベック

どうすれば、恵み深い主なる神を自分のものとすることができるでしょうか？
どうすれば、「救いの確信」を得ることができるでしょうか？
この疑問を抱いて、ドイツの宗教改革者マルティン・ルターは宗教改革を始めました。ローマ・カソリック教会はトリエント会議で、「救いの確信は持つことができない」と宣言しています。そしてさらに、「救いの確信を持っていると言う者は、呪われる」とまで言いました。マルティン・ルターは、元はカソリック教会の祭司であり博士でした。しかし彼は聖書の中に、「現在救いを持っていて、その救いをほめたたえている人々」を見出したのです。

信仰によって義と認められた私たちは、



私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。（ローマ5・1）

ここでパウロは、「将来」ではなく、「現在」すでに神との平和を持っている、と言っています。もちろん「主なる神との平和」は、使徒だけが持っていたのではなく、信者のすべてが持っているものです。

また、パウロはエペソにいる信者たちに、次のように書き送っています。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ2・8）

ここでパウロは、「将来あなたがたは救われるだろう」という不確定な希望を述べているのではありません。「あなたがたは救われた」、つまり、「すでに現在救われているのだ」と、過去形で書いています。

マルティン・ルターは「救いの確信」を得るために激しく闘いました。そしてルターは「救いの確信」を得て、「これこそ私にとって一番大切な宝である」と言いました。

ある青年が年配の信者に、「救いの確信は、はっきりと掴むことのできないものだと思う」、と言いました。また、「救いの確信は、私たちが毎日新たに掴まなければならないものではないか」とも言ったのです。すると年配の信者は、「私の家の庭にはリンゴの樹がある。この樹は太陽が出ても雨が降っても、リンゴの樹だ。これと同じように、一度主イエスを救い主として受け入れ、神の子供となった人は、雨が降ろうが風が吹こうが神の子供だ。このように、救いの確信は、一度持てば永久に続くものだ」と語りました。

私たちはこの年配の信者のように、「救いの確信」について、しっかりとした土台に立っているでしょうか。

「救い」を自分のものにするには、「救いを得よう」というしっかりした目的がなければなりません。そして、救いを自分のものとした結果が、「救いの確信」なのです。

「救いの確信」を自分のものとするには、次の4つのことが必要です。

1救いの歴史的事実を知ること
2救いの提供について知ること
3救いを自分のものにすること
4救いを持つこと

その後で、「救いの確信」が自分のものとなります。

私たちは、「救いの歴史的事実」を疑うことができません。神の子として主イエスがこの地上に来られ、十字架の上で救いのみわざを成し遂げられたことは、疑いのない事実です。次に聖書は、救いに至る道、「主による救いの提供を受け入れるべきこと」を教えています。この「救いの道」を自分のものにするかどうかは、人間にかかっています。主から提供された救いを、人間が自ら手を伸ばして受け入れ、自分のものにする。これが信仰です。「救いを自分のものにすること」です。

私たちは、まだイエス様を知らず、信じていない人が、イエス様を知り、信じた瞬間に、「救いの確信」を得る、ということを疑いません。もし「救いを自分のもの」としたら、「救いの確信」も必ず与えられます。

次に、「救いの確信」についてさらに深く、「救いの確信の土台」、「救いの確信の成り立ち」、「救いの確信の内容」、「救いの確信の結果」の4つを、ごいっしょに考えてみましょう。

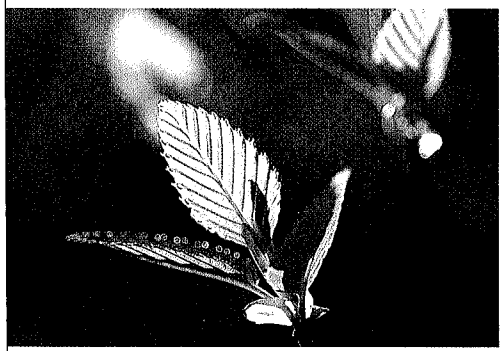
ここでちょっと注意していただきたいのは、「救いの確信」にも、本物とにせものがあるということです。聖霊が人の霊に働くとき、「真の救いの確信」があります。しかし、「悪い、偽りの救いの確信」も存在します。「悪い、偽りの救いの確信」は人間の魂から出てくるものであり、人間が作り出した、似て非なるものです。良いキノコと毒キノコが見分けにくいように、「真の救いの確信」と「偽りの救いの確信」も非常によく似ています。このことは、文中でくりかえし注意して見ていくことにします。

1 救いの確信の土台

「救いの確信の土台」は、二つあります。その一つは「神のみことば」であり、もう一つは「イエス・キリストの内にある神の人格」です。つまり、主イエスが成し遂げてくださった「救いのみわざ」です。

「救いの歴史的事実」と「救いの個人的体験」について、私たちに教えてくれるのは聖書だけです。聖書は、「救いの事実」と「救いの確信」は両方とも必要なものであり、この二つは分かちがたく結びついている、と言っています。新約聖書の福音書は「救いの事実」を啓示する特別な書物であり、新約聖書の書簡は「救いの経験」を教える特別な書物です。また福音書は、救いの事実だけでなく、救いの経験についても語っています。その一つを見てみましょう。

この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。（ヨハネ20・30,31）



新約聖書の書簡も、救いの経験だけではなく、救いの事実をも語っています。

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。……しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。　(1ヨハネ5・13,20)

「救いの事実」を語っている言葉は、「救いの経験」の土台です。聖書は神の言葉であり、完全な権威を持っています。ですから私たちは、この言葉に信頼することができます。聖書を神の言葉だと信じていない人には、「救いの確信」は決してやってきません。いかに道徳的に優れた人であっても、聖書の言葉の一つを、人間の言葉と考えているなら、「救いの確信」を得ることはできません。

「救いの確信」は、人間の外にあります。「救いの確信」は、全く人間にかかっていません。ここで、にせの救いの確信について、すこし見てみましょう。にせの救いの確信は、神の言葉と主イエスの聖なる人格に基礎を置いていません。にせの救いの確信は、人間の中にその土台を置いています。例えば人間を中心とした感情や想像力、特殊な体験や経験、努力の結果などに土台を置いています。これらの土台はしっかりとしたものではなく、絶えず揺れ動く頼りないものにすぎません。

まことの救いの土台は、主イエスのなしてくださった救いそのもの、聖書のみことばそのものです。私たちはどうして「救われた」と知ることができるのでしょうか。それはただ一つ、神のみことばによってです。主イエスの十字架の血潮が私たちを救い、聖書のみことばが私たちに確信をもたらします。

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。　(1ヨハネ5・13)

ここには、「あなたがたが望んだり、考えたりするため」だとは書いてありません。「あなたがたによくわからせるため、悟らせるため」だとあります。「いい気分を、私はあなたがたに伝えた」のではなく、「私はこれらのことを書いた」とあります。では、何が書かれたのでしょうか。そのひとつは次のことです。

わたし(イエス様)のところに来る者を、わたしは決して捨てません。(ヨハネ6・37)

あなたは「イエス様のところに行った」のでしょうか？　もしあなたが、もうすでに「イエス様のところに行った」のなら、今、あなたは、どこにいるでしょうか？　内側でしょうか？　外側でしょうか？　イエス様はあなたを決して捨てない、と言っておられます。

主イエスがあなたを決して捨てないということは、必ず受け入れてくださる、ということです。

この方(イエス様)を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。　(ヨハネ1・12)

主イエスを受け入れた人は、神の子どもです。すべては神のみことばにかかっています。私たちの感情は毎日変わります。私は今日、救われたと感じ、明日には失われていると感じるかもしれません。しかし、感情にこだわらないでください。神のみことばだけに頼ってください。神の言われたことを信じてください。書かれていることを信じてください。神のみことばは、決して変わることがありません。

信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。　(ローマ10・17)

もしあなたが主のみことばを信じるならば、御霊はあなたの霊にあなたが神の子であることを、証しします。そこであなたは、自分の「救いを確信する」ことができるのです。

2「救いの確信」の成り立ち

「救いの確信」は、「私は本当に救われた」という経験の結果です。ですから私たちは、まず救いの訪れを聞き、「救いの確信」の土台である神のみことばを信じ、主イエスの人格が私たちの内に働きかけられることが必要です。どのようにしてそれが実現するのでしょうか。「聖霊によって」、「信仰によって」です。

聖霊の働きによって、また、聖書のみことばの力によって、救いの事実を受け入れた人は、救いの経験へと移っていきます。事実から経験に移ることを、私たちは日常の生活で知っています。電気に触れれば感電します。電気が存在するという事実は目に見えないが、手を触れて感電したゆえに、電気があるということを実感し、経験するのです。熱いストーブに触って、ストーブが熱いということを経験しますし、薬を飲んで痛みが取れると、その薬の効果を経験します。

事実から経験に移ることは、非常に大切です。「救いの事実」から、「救いの経験」へ移ることは、非常に重要です。この推移は主なる神と人間が出会うことによって行なわれます。上から来る聖霊と下からの信仰によって行なわれます。

イエス様は人間のために、救いを成し遂げられました。この救いを人間に与えるのが聖霊です。聖霊はイエス様の救いを人間に告げ知らせ、提供し、教え、証しし、人間のものとさせてくださいます。

信仰とは、主から差し出された救いを受け取ることです。信仰が自分の心を開いたそのとき、聖霊が救いをその心に入れるのです。聖霊が、人間の霊に働きかける、これが「救いの確信」の成り立ちです。

しかし、にせの救いの確信は、人間の権威によって、また人間の努力によって、これを得ようとやっきになるもので、人間をしばしば狂信に陥れます。狂信とは、根拠のない目的、達することのできない目的を意味なく追い求めている状態です。

3「救いの確信」の内容

「救いの確信」の内容は、イエス様が私たちのために成し遂げてくださった「救い」です。その救いを受け入れた私たちは、「救いを経験」することができます。主イエスは「完全な救い」を成しとげられました。その救いの中には、私たちの霊も、肉体も入っていますし、国々、全自然、全宇宙の救いも含まれています。

しかし私たちは、「今行なわれる救いの経験」と、「将来行なわれる救いの経験」を区別しなければなりません。聖書は「救いの経験」について、私たちが「過去」に何を得たか、「現在」何を持っているか、「未来」に何を持つかを、はっきりと示しています。

信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。（ローマ5・1）

主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。（1コリント6・11）

御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。（1ヨハネ5・12）

あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。（ローマ8・11）

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。（1ヨハネ3・2）

「過去」に経験したこと、「現在」持っていること、「未来」に経験すること、そのいずれも私たちは知っています。なぜなら、「救いは一つ」であり、一つの御霊がそのいずれをも啓示してくださるからです。そのことへの「確信」について、いくつかのみことばを見てみましょう。

神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。（1ヨハネ5・20）

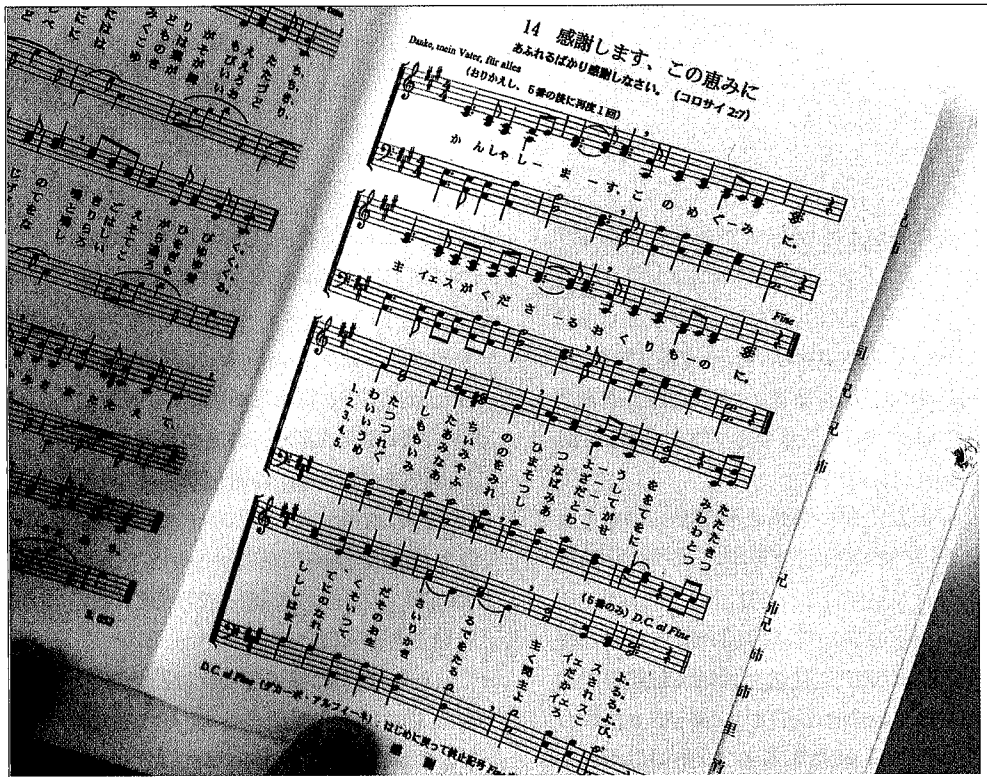
私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ8・38、39）

私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。（1コリント2・12）

主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。（1テサロニケ5・2）

あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、だれでも知識を持っています。（1ヨハネ2・20）

私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死



のうちにとどまっているのです。
（1ヨハネ3・14）

私たちが「今」経験できることは、罪の重荷と力から解放され、新しく生まれ変わり、聖霊を宿しているということです。そして「未来」に、私たちが死のからだから解放され、からだの真の救いを得る日が来ます。そのとき私たちの信仰は目に見えるようになります。

以上見てきたように、本当の「救いの確信」の内容は、主イエスがなされた「救いのみわざ」です。これに対し、にせの救いの確信の内容は、人間の考えや行ないにその基盤を置いています。人は人間の考え出した道徳的、または宗教的な基準に基いて懸命な努力を重ね、それによって救いを得ようとしますが、そのような方法では、人は決して真の救いを得ることはできません。

4「救いの確信」の結果

「救いの確信」を得た結果、人々は新しく解放され、自由な信仰の生活が始まります。

「救いの確信」の結果は、「新しい生活」と、「救いを伝える奉仕」です。「救いの確信」を持っていない人は、いつも勇気がなく失望している状態にあります。「救いの確信」からは、その「救い」をおもてに表わし、証しする勇気が生まれます。豊かな人は少々施しても何ということもありません。「救いの確信」もそのようなもので、施しても施しても限りなどありません。「救いの確信」を得た人は、その喜びを回りの人に与えれば与えるほど、ますますイエス様から恵まれるのを感じます。「救いの確信」は、この世に迷っている人々を主なる神との新しい関係に引き入れます。全てが秩序正しくなり、祈りの喜びを持つようになります。

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。
（ヘブル10・19）

「救いの確信」を得た人は、イエス様が自分のうちに何をしてくださったかを喜んで証しします。イエス様の救いの事実を宣べ伝えるとき、その救いを実際に経験していますから、証しに力と愛が加わります。

「救いの確信」がなければ、喜びに満ち溢れた証し人にはなれません。私たちが歌っている歌は、「救いの確信」から出た喜びの歌です。「救いの確信」を持っている人は、大喜びで歌うことができます。

「救いの確信」は、私たちがイエス様を宣べ伝えていく奉仕の原動力です。私たちは、「救いの確信」を得た経験や喜びを、他の人々に伝えることができます。自分でその喜びを経験したから、他の人々にも伝えたくてしかたがないのです。にせの救いの確信の結果は、自分だけは大丈夫だと思いこみ、人に対して傲慢になることです。そのような人は、自分の考えに反することが起こると、自分に絶望してしまいます。

信仰の土台、「救いの確信」の土台は、いったい何でしょうか。信仰を自力で支えようとするあらゆる人間的な努力の結果は、信仰を強めることにならずに、かえって信仰を弱めてしまいます。信仰の土台は、決して目に見えるもの、人間の思考、理解、感情ではありません。

正しい信仰の土台は、イエス様ご自身と、イエス様がなされたみわざ以外にありません。それについて、聖書は忠実に告げ知らせています。主のみことばはいかなる場合でも絶対に変わることのない真実です。信仰の土台、確信の土台は、あなたが理解したことや考えたこと、感じたことなどではありません。ただ、神の言葉である聖書のみことばのみに立っているのです。

死の彼方に輝く明るい希望

高橋 艶子

2003年12月23日、神様は私たちのような者にも憐れみと恵みを与えてくださり、87歳と4ヶ月の生涯を終えた夫正一を、天の御国に昇らせてくださいました。12月26日に葬儀を終え、今その深いご愛に心から感謝申上げております。まさに、「**神のなさることは、すべて時にかなって美しい。**」(**伝道者 3・11**)と、みことばにある通りです。

正一が常々、心から願い、申しておりましたことは、「僕が不信仰で、なかなかイエス様の証しをすることができない。僕の葬儀の時は、一人でも多くの方に来ていただいて、イエス様のことを聞き、信じていただきたい。そしてまた、天国でも永遠に仲良くしていただきたい」ということでした。

正一の願いを一人でも多くの方々にお伝えしたくて、葬儀の模様を小冊子にいたしました。2月11日の納骨式の日に発行して、参列してくださった方々にお渡しすることができました。その後、親戚や正一と関わりの深かった方々に、この小冊子をお送りしておりますが、その反応に驚きと感謝の日々が続いております。

正一が、どうしてイエス・キリストを救い主として受け入れたのか、今から23年前になりますけれども、正一が当時書いた短い証しの文章がありますので、書かせていただきます。

「人は目的と希望を持って、毎日いろいろな障害を乗り越えて力強く生きようと努力しております。しかし、どのような幸いをつかんで自分自身の心の中に満足を得たとしても、それは一時的なもので、何かわびしさを感じざるを得ません。私の場合、人生の大半を社会生活の渦の中に投じ、神の存在から遠く離れて生活していました。

しかし、3年ほど前、健康に自信を持っていた体が胃がんと宣告されて、初めて人間の弱さをまざまざと感じたのです。早



吉祥寺キリスト集会で行われた正一さんの葬儀で、家族と一緒に。右から3人目、艶子さん

くから信仰を持っていた妻と息子と共に吉祥寺キリスト集会の皆様の、私を案じてくださる厚い祈りと神の導きに目覚め、今まで神を無視してきたことを心から悔い改めて、イエス・キリストを信じて、救い主として受け入れました。約束されている永遠の命が与えられていることを知り、その時から、死の恐れからも解放され、真の目的を持って、喜びと平安の新しい人生を歩む確信が与えられました。愛に満ちた主のみこころの偉大さ、神がすべてを支配し、日々の歩みの一歩一歩を導いてくださるご慈愛に感謝と賛美を捧げずにはいられません。主に感謝せよ。主はまことに慈しみ深い。その恵みは永久まで。」

夫の聖書には、次のみことばの横に、赤い線が引かれていました。

あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。 **(詩篇 56・13)**

幼い信仰の私たちでしたけれども、主は憐れみをもって、少しずつイエス様のことをわからせてくださいました。それ以来、長い間の祈りがかなえられ、日曜日には共に礼拝や福音集会に出席し、また地方の集会に集っておりました。また、私どもの家を提供して家庭集会を開かせていただいたりして、恵まれた晩年を過ごさせていただいておりました。

正一は若い頃からスポーツで鍛えておりましたので、あまり病気をしない人でしたが、二十数年前、胃がんの後、少しずつ体力も衰えて来まして、7、8年前から肺気腫と診断され、毎月病院に通院しておりました。昨年の春頃から食事が進まなくなり、また肺炎を起こしたりして、6月初めから東海大学八王子病院に入院させていただきました。東海大病院では、同じキリス

ト集会に集う白石ドクターをはじめとして、大勢のナースの方々の、愛に満ちた手厚い治療と看護にあずかり、病気を忘れるほどの感謝の毎日でございました。

9月からは、自然に恵まれた奥多摩の日の出が丘病院に転院いたしました。山の静けさと澄みきった空気につつまれた日の出が丘病院は、山が好きだった正一を喜ばせました。ゆったりと家族的な雰囲気で、職員さんたちが温かく対応してくださり、またケースワーカーさんが本当に親身になってお世話してくださいましたことも、ことばにできないほどの感謝でした。大変恵まれた療養生活は、本当に神様からいただいた豊かな恵みの時でございました。

元気な時は、少々頑固で気難しい夫と思っておりましたが、体力が衰えるにつれて、外側の頑固さや気難しさが少しずつ削がれ、やさしい心の夫だけが見えてきて、大変いとおしく思うようになってまいりました。結婚して57年、苦しみ、悲しみ、また楽しみを共にしてまいりました夫との残り少ない日々を、これから大切に、大切にしていきたいと思わされ、病院に行って過ごす時間が何よりの楽しみになりました。「**弱いときにこそ、…強いからです。**」(**2コリント 12・10**)というみことばがありますが、私どもの力がなくなった時、神の力が私ども二人の上に、注がれていることを実感しました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

(ピリピ 4・6、7)

毎日共にイエス様を信頼して、正一が一番好きだった詩篇23篇の色紙を散歩の時も持ち歩き、それを読んであげると、一行読むごとに正一は「うん、うん」とうなずき、二人で祈れる毎日は喜びに満ちあふれ、ただ、ただ感謝の日々でございました。土曜日に帰る時は「明日は日曜日ですから、こちらはお休みして礼拝に行って、パパの分まで礼拝させていただいてきますね」と申しますと、最初は「ありがとう」とそのたびに言っておりましたが、最後の頃はプッと横を向いて返事をしてくれず、心の痛む時もありましたが、そんな時は「イエス様、どうぞ、主人のことをよろしくお守りください」と祈りつつ、病院を後にいたしました。

召される2、3日前から軽い肺炎を起こし、少し苦しそうでしたが、その日も痰や咳で胸が苦しそうで、息づかいが荒くなったので、「お祈りしましょう」と頭をなでながら祈ると安心して、私の顔を引き寄せるようにして、目をつぶって穏やかな眠りにつくのです。そのようなことを繰り返しているうちに、急に顔色が変わり、看護婦さんを呼んだ時はもう、呼吸は止まっていました。イエス様は、イエス様がよしとされる一番すばらしい時に、天の御国に一気に引き上げてくださったように思いました。本当にあっという間のできごとでした。あまり苦



(左)自宅で、孫の叶実さんと一緒に、(右)1988年、夫婦で旅行した折に

しみもなく、イエス様は正一の87年の生涯を「もう苦しまなくていいよ。わたしのところへ来なさい」とサッと天国へお呼びくださった、という印象でした。私はしみじみと主に感謝いたしました。

夫と結婚した時は、神様のことはわかりませんでしたが、イエス様を信じてから、この結婚の背後にも神様の導きがあった、と確信するようになりました。そして、こんなにいい夫を与えてくださり、3人の子と3人の孫をお恵みくださり、最後は病気を通して神の愛と慈しみ、夫のやさしい心、夫との固い絆を存分に味わわせていただいたことに、感謝でいっぱいです。57年の幸せな生活を、イエス様、本当にありがとうございました。正一はいま、死も、悲しみも、苦しみもない天の御国でイエス様に迎えられ、先に召された方々と喜びの再会をしていることと思います。聖書にはこう書かれています。

私たちの国籍は天にあります。

(ピリピ 3・20)

最後に、孫の叶実が昨年3月、小学校卒業の時に書いてくれたみことばを添えさせていただきます。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・16)

以上の証しを、夫正一の感謝を込めた「遺言」とお受けとめいただきましたら、幸いに存じます。夫の願いを私自身も祈りつつ、愛する正一に再会するその日まで、主に従って残された日々を歩んで行きたいと存じます。

■

1927年静岡県生まれ。沼津高女専攻科卒。1947年正一さんと結婚。長女 直子さん、長男 良幸さん、次男 正敏さん。結婚後アートフラワー、フランス料理、中国料理などを学ぶ。

試練のきわみで 真の幸せを実感しました

瀬島 志郎

（瀬島志郎さんは2003年12月8日、進行性大腸がんで入院。手術後1月30日に仮退院されました。今は自宅から通院受療中です。入院中お見舞いに訪れた方々に宛てた、瀬島さんのお礼の手紙を、「証し」として紹介させていただきます。）

尊き主の御名を賛美申上げます。

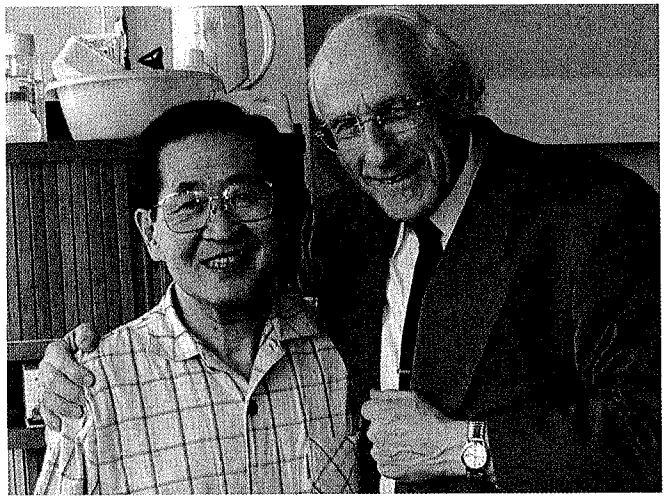
入院中は、ご多忙の中お見舞いに来てくださり、ありがとうございます。その節は綺麗なお花に加えて、心のこもったみことばをいただき、お話し合いの時が与えられましたことを心から感謝申上げます。

主は、元気でいました時には見えなかったこと、気づかなかったことを、身近に引き寄せて示してくださいました。

私はこれまで、日々の生活の中で条件が満たされることは幸せだ、と思い込んでいましたが、このたびの入院生活は条件が満たされるどころではない、2ヶ月近いうちの50日間が水を飲むことも断たれた、点滴だけという生活でした。しかし、そのような境遇に置かれた時、イエス様がいつも近くにいてくださることを、改めて知ることができました。環境が満たされず、試練のきわみの状態にある時に、真の幸せを実感できたことは大きな恵みでした。

病いを与えられて、大腸がんの部位だけでなく、身体のすべての器官と臓器をいとおしく感じられるようになりました。それ以前は、臓器が正常に働いていることを当たりまえと思い、日ごろの感謝が欠けていました。今、そのことを詫びたい思いに駆られております。「当たりまえ」と言う傲慢さの内には、本当の幸せはないことを示されました。「当たりまえ」でなくなった時、初めて「当たりまえ」のことがどんなに幸せなことかも知らされました。

このたびの入院は、主が私になしてくださった最も適切かつ必要な御業（みわざ）であった、それも最善の時になしてくださった、と確信することができました。また、



病院で、ベックさんのお見舞いを受けて

届けていただいた録音テープ（ベックさんが「リバイバル（信仰の覚醒）」について語られたメッセージを収録したもの）を聴いて、私のがんの病巣の手術以上に、私の信仰生活の手術が必要であったことを思わされました。

吉祥寺キリスト集会の方々、全国のキリスト集会の方々のお祈りに支えられて、大きな試練を乗り越えることができました。本当にありがとうございます。そして、多くのことを学ばせてくださり、祝福してくださったイエス様に心からの感謝と賛美を捧げます。

退院後ちょうど1ヶ月が経ちました。仮退院で、通院と食事制限の毎日です。体力が回復し、食事と行動がもう少し良好になりましたら、ぜひお会いして語り合う機会が与えられますようにお祈りしています。

病院でお世話になった担当医の小川信先生、福岡におられる先生のお母さんのことも、イエス様の福音が伝わりますようお祈りください。また、多くの看護士の方々のこともお祈りください。

「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」　（ヨハネ 3･30）

1935年島根県生まれ。出雲二中、県立出雲高、法政大卒。亀岡商会入社、11年後、瀬島商会創立。1983年、妻安江さん肺がんで召天。

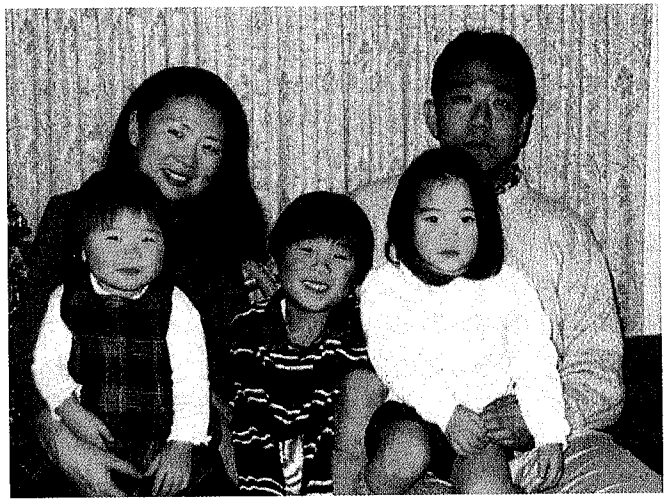
ああ驚くべきイエスの愛よ

井上 桃子

私が主を第一にして人生を歩んでいきたいと決心したのは二十歳のときでした。それからは、まわりを見て自分と比べたりしていた古い自分から解放され、自分らしく生きてこられたと思います。

結婚し、子どもが3人与えられ、忙しくても充実した毎日を過ごしていたある日、胸のしこりに気づき、近くの病院を訪ねましたが、はっきりせず、「どうせ大したことはないのだから」と病院へ行くのをやめようかと思っていた時、妹にがん検診センターでの受診を強く勧められました。「そんなに言うなら」と軽い気持ちで検査を受けた2、3日後に検診センターから早急に来てほしいと呼び出されました。先生の話は「あなたがしこりがあると思っていた方ではなく、左側にガンが見つかりました。しかし、とても小さいので手術すれば、高い確率で治癒するでしょう」というものでした。私はわりと冷静に聞くことができましたが、ドアを閉めた瞬間、頭の中に3人の子どもと主人の顔が思い浮かび、涙が溢れてきました。「あっ、感情に身を任せたら、私は立ち上がれない」と思ったと同時に、「**感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます**」(**ピリピ 4・6、7**)という聖書のみことばが頭の中いっぱいに広がりました。すると、さっきの絶望的な感情がすっかり消え、心の中は言いようのない安らぎで一杯になりました。たった一瞬で、不安な思いを打ち消してしまう主イエス・キリストはなんてすごいお方なんだろうと驚き、心の底から感謝いたしました。

その夜、主人と病気について調べたり、闘病記を読んだりしているうちに乳ガンという病気の怖さにショックを受けましたが、イエス様にがっちりと手を握ってもらっているようで、必要以上に恐怖心を持つこともなく、2人で祈り、眠りにつくことができました。



左から、次女　奏さん、桃子さん、長男 陸さん、長女　琴さん、夫 浩一さん

それからは、何か特別な力ですっぽり包まれているような思いで、死の病ガンというものから目をそらすのではなく、しっかりと向き合うことができたと思います。

その後、大変心強いことにキリスト集会の方が、ご自身の大学病院の乳腺科を紹介してくださり、安心して治療をお願いすることができました。

手術のための入院は夏の暑い盛りでしたが、主人は夏休みを取ってくれ、私は何の心配もせずに入院することができました。すぐに検査を受け、いよいよ明日手術という日の朝になって、主治医の先生から、私の腫瘍が当初の予想より大きいことを告げられました。ほんの1、2センチ切除する簡単な手術ではなく、かなり大きく切り取らなければならないといわれました。主治医の先生を信頼しすべてをお任せすることにし、手術に臨みました。手術は無事終わり、悪い部分はすべて取れたこと、大事をとってリンパ節も切除したことなどを後で聞かされました。これからは早くもとの体調に戻りたいといった思いで一杯だったので、その後のリハビリの痛みなど、さほど気にならず、退院しました。

ところが、退院して1週間目の検診の時に先生から思わぬことを告げられたのです。「大事をとって切除したリンパ節の中にガンが転移していることがわかった。万が一、他にも転移しているということを想定して抗ガン剤の投与を勧める」ということでした。これには、かなり大きく打ちのめされました。主人は私が退院した後も、キリスト集会に集っておられる上司がお休みを下さって、休んでくれておりましたが、退院後は少しでも自分で家の中のことをやろうと思っていたので、転移の話を聞いた日はベッドから起き上がれず、空ばかり眺めていました。

私が寝ている部屋からも子どもたちが元気に遊ぶ声が聞こえ、その声を聞いては涙が溢れ、子どもたちの笑顔を見ては涙が溢れ、私が先に天国に行ってしまったら、主人はどうするだろうと考えては、また涙が流れてきました。そして、その時はっきりとわかったのです、ガンを宣告されたときは「手術すれば治る」と自分に言い聞かせ、腫瘍が大きいといわれたときも「少し大きく切れば全て取れるのだ」と自分に言い聞かせ、イエス様に頼っているつもりだったのに、本当は自分の力で「これくらいなら、まだ大丈夫」だと乗り越えようとしていたことが。そして、今度という今度は、私にはもうどうにもすることができませんでした。

その翌日も空が青くよく晴れた日でしたが、同じようにベッドに横になり、泣きながら聖書を読んでいました。すると、ふっと心に浮かんできたのは、「私がイエス様と共に歩みたいと決心してから今日まで、主は私にいつも最善をなしてくださった。就職のことも、また主人と結婚できたことも、かわいい子どもたちが3人も与えられたことも、子どもの通う幼稚園までも、主は全て私の考えよりはるかに良いものを私にくださった。もし、私が近日中に天国に行ったら、私という母親の代わりを主がしてくださる。私という妻の代わりを主がしてくださる。私にしてくださったときと同じように主人にも、子どもにも最善をしてくださる。それは、私よりもはるかにすばらしいものになるに違いない。なのに、私が自分の思いで、まるで私がいないと主人も子どもたちもどうにもならないと思うのは、自分勝手ではないか」。そう気が付くと、「ああ、なんて自分は愚かなんだろう。自分が可哀想なだけではないか。子どもの成長に立ち会えないと嘆いているだけではないのか」と思え、今までの涙がうそのように止まり、私よりもイエス様が家族の中心にいて一番心配してくださっていることを思うと、今度は喜びの涙が溢れて心が晴々とした気持ちになっていきました。

夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある。私が栄えたときに、私はこう言った。「私は決してゆるがされない。」　（詩篇 30・5、6）

その日の翌日は主治医の先生が、時間を割いて話をしてくださるというので、主人と出かけましたが、その道中、主人にそのことを話すと、主人は車を静かに路肩に停めてコーヒーを買ってきてくれました。そして、「人間はずーっと先まで自分の人生があるように思っているだけだね」と話してくれました。そして、これほどの絶望の淵に立たされているのに、こんなにうれしく自分の力で明るく振舞おうと努力したり、歯を食いしばったりしなくてもよい信仰を持っていて本当に良かった、と二人で喜びの涙を流しながら話しました。

主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンにはいり、その頭にはとこしえの喜びをいただく。楽しみと喜びがついて来、嘆きと悲しみとは逃げ去る。　（イザヤ35・10）

先生の話を伺い、安心して抗ガン剤の治療を受けようと決めることができ、その10日後から3週間に1度、通院で点滴の抗ガン剤を入れるという治療を6回、約4ヶ月間受けることになりました。抗ガン剤の治療は、吐き気などの副作用との戦いですが、幸いなことに主治医の先生が吐き気止めなどを効果的に使ってくださり、初回から一度も吐くことはなく、食欲もありました。2、3日すると全身がだるくなり、身体をたてにしているのがつらいということが3、4日続いて、その後、だんだん元の体調に戻る、ということの繰り返しです。この苦しさを自分の力で乗り切ろうと心のどこかで思っていると、その病状はつらく苦しいものですが、聖書を読んだり、祈ったりしていると、安らかに眠っていたりすることもあります。気分が悪いときも、「イエス様助けてください」と心の中で叫ぶと、不思議と気分が良くなったり、試行錯誤しながらも、一瞬一瞬を主に頼って生きていた毎日でした。また、この間、たくさんの集会の方々がお見舞いのお電話やお手紙を下さり「お祈りしてるね」と言って励ましてくださったことが、どれほど力になったかわかりません。

長かった4ヶ月が過ぎ、1月に久しぶりに病院に行くと、以前の私のように点滴を受けている患者さんを見て、あらためて驚きました。というのは、私は本当は怖がりで、痛がりで、ちょっとのことで大騒ぎをするような臆病者です。その私が、毎回、点滴の針が入らないと抜いたり入れたりを繰り返し、あの副作用の苦しみから逃げ出さずに4ヶ月間耐えられたのは、本当に私の力ではなく、主の哀れみそのものだったのです。人間の目から見れば、今まで経験したことのない試練のときでしたが、主の目から見れば、私が失ったものは何もなく、むしろ病気を通して得たものは、はかり知れないのです。私だけ特別にイエス様から愛されているようにさえ思えます。そして、以前にも増して主人と心の深いところで繋がることができたように思います。これは、人生において何にも代えがたいものでしょう。これから先、再発するかどうか、今の私には全く予想がつきませんが、それも全て主に委ねて、日々を感謝しつつ主を賛美し、家族で歩んでいきたいと思っています。

1962年東京都生まれ。宝仙学園短期大学保育科卒業。多摩市在住。夫　浩一さん、長男　陸さん、長女 琴さん、次女 奏さん。

信仰はいのちの問題

井上 浩一

「奥さんのガンはわずかなもので日帰り手術ですぐすみますが、念のために入院しましょう。」医師の最初の説明はこうでした。ところが、手術前日に「思ったより範囲がひろく、右の乳腺は全部摘出したほうが良い。初期レベルのリンパ節への転移も疑われます」と状況が一変し、次は手術中に呼ばれて「リンパ節への転移は思ったより進んでおり、念のためレベルⅢまでのリンパ節切除をしました」と説明されました。

手術は無事に成功しましたが、他の臓器への転移の可能性を見極める必要があり、その上で今後の治療法を決めることとなりました。

妻は、先ず「乳がん」であることを受け入れ、次には「部分切除」を受け入れ、そして「右乳房全部摘出」を受け入れました。ひとつを受け入れると、次の難題が起こります。「どこかで踏みとどまることができれば」という思いに反して、事態は急転していきました。

語られる医師の言葉には常に「場合によっては・・・」という深意がうかがえました。「場合によっては"死"を覚悟してください」と私には感じられて、わずか数日の間に、否応無く「妻の死」を考えるようになりました。

そんな中で、妻は私に「私はガンになって、本当にイエス様に愛されていると感じる」と言いました。私は素直に「すごいなあ」と思う一方で、心のどこかで「それどころじゃないだろ」とつぶやいていたように思います。

私は11年前にイエス様に出会い、救われました。妻桃子との結婚がきっかけでした。私にとって妻は、同じ信仰を持つ姉妹であるとともに、揺るぎやすい信仰者の私をイエス様に繋ぎ止めてくれる「錨」でもありました。突然、その妻を失うかもしれないというのです。

結婚して、私たち夫婦は3人の子どもを与えられました。この3人の幼い子を残して妻が死んでしまうかもしれない。私はどうなるのか？子どもたちとどう生きていけばよいのか？私の頭に浮かんだのは、こういった「この世の思い」でした。妻の入院中も毎夜、子どもたちを寝かせてから、悶々と思い悩む日が続きました。その思いを自分ではどうすることもできません。ただ、最後に私が辿り着いたのは「結局、妻や子どもではなく、自分自身が不安なだけなのだ。この期に及んでも自分のことしか考えていない」ということでした。本当に自分の罪深さを思い知りました。そして、その時ただ「祈るしかない」と思いました。自分の正直な気持ちをすべてイエス様に聞いていただき、ひたすら全てをお委ねしますと祈りました。

すると、「イエス様が自らいのちを捨ててまで私たちに与えて下さったのは何なのか、"永遠のいのち"ではないか。それなのに何故"この世のいのち"にしがみついて、思い煩っているのだ」という思いが与えられました。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」　(ヨハネ 11・25)

イエス様が私たちに与えてくださったのは、この世を生きるいのちではなく、イエス様のそばで、天の御国で生きる「永遠のいのち」です。そう思い至ると本当に涙が溢れてきました。

妻がガンを与えられたのも、イエス様からの恵みをいつしか当たり前のように受け取っていた私たちに、イエス様が憐れみをもって再び熱い湯を注いでくれたのだと思えました。仮に妻が召されることがあっても、それは別れではない。悲しむのではなく、今、家族で過ごせる一瞬、一瞬の時間こそが、イエス様に与えられた恵みだと心底から思え、感謝の気持ちで一杯になりました。



左から、次女 葵さん、妻 桃子さん、長女 琴さん、浩一さん

退院後、抗がん剤での治療が4ヶ月続きました。多くの集会の方々の祈りに支えられた時間でした。その間、全てがイエス様からの恵みである、という私たちの思いは揺らぐことなく、むしろ確信に変わっていきました。子どもたちも、薬の副作用で髪を失った妻に動揺することなく、不安な様子さえ見せません。いつもと変わらぬ子どもたちでした。本当に主の力を実感しました。

私は、イエス・キリストを信じる信仰は、紛れもなく「いのち」そのものなのだと実感しています。

1964年東京都生まれ。明治大学文学部卒業。村上・鶴田法律事務所勤務。妻 桃子さん、長男 陸さん、長女 琴さん、次女 葵さん。

すべてのことは備えられたものでした

池田 潤太

私は昭和33年10月、武蔵野市吉祥寺に生まれ、6歳のとき今住んでいる国立市に転居しました。自宅の前に教会があり、母の勧めで日曜学校に通いました。数年も経つと大体の話を覚えてしまい、それほど行きたい所でもなくなって、教会へ行ったとき以外は聖書を開きませんでした。それでも自分はクリスチャンだと思っていました。

中学3年のとき、教会の牧師に勧められて、春休みの15日間を米国の海外教会学校で過ごしました。午前中は英語を習い、午後は聖書の学びという日課でした。帰国後しばらくはアメリカにかぶれていましたが、同時に教会にはなにか自分の求める大事なものがあると思い、毎週欠かさずに出席していました。が、それも数ヶ月の間でした。そこには海外教会学校のような充実感がなく、秋には行かなくなりました。

翌年2月、叔母に誘われて吉祥寺キリスト集会の特別伝道集会に参加しました。そのとき驚いたのは、壇上で語られる方が引用する聖句の多さでした。自分はそれなりに聖書を知っている、と思っていたのが間違いであったことを知らされました。その後、ベックさんが祈り会で私のことを祈ってくださったことを叔母から聞いてショックを受けました。私のために祈って下さる人がこの世にいる、という驚きと、「私はクリスチャンだと思っていたけど違うんだ」と瞬間的に思わされたからです。

その頃から聖書をよく読むようになり、集会の方々との語り合いを通して、神様から離れて自分勝手に生きることこそ罪であること、人間はその状態から救われなければならないこと、そのためにイエス様は十字架にかからなければならなかったこと、私の罪の代価は完全に支払われたこと、3日後に復活されて私たちに新しいいのちを与えてくださり、今も共にいてくださること――を確信できました。

そして3月の特別伝道集会の時、私自身がイエス様を受け入れなければならない、そう迫られていると感じて決心しました。だれかに言われてとか、外圧によってではなく、イエス様と私との全く個人的な関係においてでした。

その後、この決心を集会の人に話すと、すぐにベックさんと個人的に話す機会が与えられました。ベックさんは聖書のみことばを引用しながら、真の救いについて丁寧に話して下さり、最後にお祈りをしました。私はそれまでにない深い喜びに満たされました。その頃から、聖書のみことばにかかっていた霞が晴れたように感じられました。

当時、父はまだ救われておらず、私が集会に行くことや洗礼を受けることに反対はしませんでしたけれども、もっといろいろなことを知ってから決めた方がいいんじゃないか、と言っていました。そして、私が大学受験に失敗すると「勉強しないで集会へばかり行っているからだ。もう集会へは行くな」と言い出しました。このため浪人生活も、父に向けて信仰を「証し」するものでなければならないと思い、生まれて初めて真剣に勉強をすることになりました。

大学へ進むと、父の両親が突然、仏教を捨ててイエス様に従う決心をし、母と共に吉祥寺キリスト集会に出るようになりました。そして、自宅で始めた家庭集会で弟も信仰に導かれ、母と弟と私の3人で父の救いを祈るようになりました。すると、あの目茶苦茶な父が突然、「来年1月から集会に行くよ」と言い出したのです。奇蹟が起きたと思いました。イエス様は私たちの願いを聞き入れてくださったのです。



左から、妻 和恵さん、潤太さん、長女 牧葉さん

大学を卒業して社会へ出ると、想像していた以上にきびしい生活が待っていました。勤務医を経て30歳で歯科医院を開業すると、拘束される時間はますます長くなりました。そのようなとき、歯科衛生士の妻もイエス様を受け入れ、4ヵ月後に結婚しました。その後、妻の両親も救われました。

振り返ると、すべてのことは、主イエス・キリストに従うために備えられたものでした。私たち親族のために祈り、励ましてくださった多くの方々にも心から感謝します。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。　（エペソ 1・3）

1958年東京生まれ。桐朋小、桐朋中、桐朋高、日本歯科大学卒、桜ヶ丘歯科医院などに勤務後、国立市で歯科医院を開業。妻　和恵さん、長女　牧葉さん、父 伝一さん、弟 洋介さん。

虚しさからの解放

山本 京亮（けいすけ）

私がイエス様のことを求め始めてから、3年余りが経ちました。それまでの20数年間、私は無神論者としての日々を送ってきました。幼い頃から同級生に異分子として叩かれることが多かった私は、社会に対して強い疎外感を抱きながら育ちました。周囲の人間に自分の実力を認めさせたいという思いから、特に中学から高校にかけては、全てにおいて完璧な成績を自分に求めるようになり、自分の満足する結果を得てきました。結果が自信を、自信が異常なプライドを生み、半ば自己崇拝者のような状態であったと思います。その後、優等生的に生きることに虚しさを感じた私は、大学入学後は以前とは180度逆に、放蕩を始めるようになりましたが、放蕩も心身を満たすことはありませんでした。逆に恐ろしいほどの虚脱感に襲われ、21歳の時に生きる方向を見失いました。母を通してキリスト集会に導かれ、伝道者の書の存在を知ったのは、ちょうどその頃のことです。

空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。

（伝道者 1・2、3）

この言葉は当時の私の気持ちそのものであったこともあり、心の奥底まで染み込み、自分にとっての主の招きの言葉となりました。聖書を信じるきっかけとなったのが、この言葉であることは疑いの余地がありません。その後、日曜日ごとに礼拝に集うようになりましたが、当初はイエス様を求める気持ちはありませんでした。イエス様の十字架の重要性を論理的に理解できなかったため、周りと心を一つにして祈ることができませんでした。しかし、集会に集って聖書に触れ、人々と話しているうちに、いつのまにかイエス様が自分のために十字架にかかって死んでくださったという事実を、理性ではなく感覚で理解するようになり、そのことに感謝と喜びを感じるようになっていました。

自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。　（マタイ 6・20、21）

私は聖書中のイエス様の発言は知性というレベルを超えている、と感覚的に思いました。作家は物語を描くときに登場人物の発言を考えますが、人間がイエス様の発言を考え付くことなど不可能であると感じました。つまり、聖書は事実に基づいて書かれており、イエス様の本質は神以外にあり得ない、というのが私の得た結論でした。2002年の元旦に受洗したものの、その後も相変わらず自分勝手に生きてきましたが、受洗前に比べて自身のわがままに敏感になっている自分を発見しました。また、どんなに崇高であっても、自分の思いというものは一切信用できない、ということも主から教えられました。映画や演劇では、よく真の愛について語られていますが、イエス様が十字架の死で示された真の愛は、生身の人間には存在しません。しかし、その愛が自身の努力によってではなく、信仰によって主から一方的に与えられる事実を体験した時に、私の心は主に対する感謝の気持ちで満たされました。



2003年ドイツのよろこびの集い（フィリンゲン）にて。後列左端、山本さん

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません。　（1コリント 13・4〜8）

信仰の弱い私は、自身の自我に翻弄されながらも、主に祝福されることだけを願って歩んで行きたい、という思いを与えられました。この世のことに目を奪われず、イエス様だけに信頼し、主の栄光だけを求めて一心に走り、神から栄冠を頂くことができれば、これに勝るものはないと確信しています。

1978年東京生まれ。本宿小、成城中、成城高、早稲田大学商学部卒業。父 棟治（むねはる）さん、母 崇子（たかこ）さん、姉 真秀（まき）さん。2004年4月に滝朋子さんと結婚。

強いと思っていた私は本当は弱い者でした

滝 朋子

今から20年前、私が小学校高学年の頃、6歳下の弟が近所の教会幼稚園に通うことになって、わが家に初めてイエス様が訪れて下さいました。当時は、ごく自然に神様の存在を信じていましたし、教会の牧師さんの「家族や周りの人は関係ない。朋子とイエス様の1対1の関係が大切」という言葉で、自分から神様を求めるようにもなりました。

私は幼い頃から親の目を異常に恐れており、自分の考えや感情は極力押さえ込み、何でも隠しておくという性質を持っていました。見えない眼、聞こえない耳、しゃべらない口がどんどん発達し、いつしか嘘をついても表面上うまくいけばそれで良い、と考えるようになっていきました。

両親が教会へ集うようになってから、少しずつ家の中が変わり始めましたが、私の傲慢で強情な性格は、年々強くなり、自分の心の中を表すことはせず、ひたすら早く自由になりたいと願っていました。なぜなら中・高時代に興味があった演劇の世界を反対されて断念したことがあり、大学こそは自分のやりたいことをやる!と自我の境地に陥っていたからです。そして与えられた大学は、滑り止めのさらに滑り止めの大学で、私の希望とはかけ離れていましたが、それでも新しい場所が与えられたことがとてもうれしく、喜んで通いました。しかし、すぐに女子大特有の空気に幻滅・絶望し、今度は卒業までの年数を指折り数えて心待ちにする日々が続きました。

そんな折、両親が成人祝いにと、初めての「ドイツよろこびの集い」へ行かせてくれました。この集いが大きな転機となり、主に心から賛美をするというかけがえのない喜びを体験することになったのです。その前年、御代田の国際福音センターでメサイアの演奏を初めて聴き、幼少期ヴァイオリンを習っていたので、私もオーケストラに加わりたい!と細々と練習に参加するようになり、音楽を通して主がいつもそばに居てくださる、と確信するようになっていきました。そしてドイツで、**「もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」**(**ヘブル 10・17**)という聖書の言葉を与えられ、今までの自分の愚かな行動を心底、主に悔い改めさせられました。

しかし、せっかくの悔い改めも長続きはせず、今度は陶芸に夢中になりました。

礼拝にも行かず、大好きな演奏の賛美にも参加せず、自分の思いにどっぷり浸かった2年間でしたが、平安は全くなく、心からの満足は得られませんでした。ずっと



2004年元日に受洗後、ベックさん、家族と。右から2人目、朋子さん

熱望していた自由と考えていたものが、実は本当の自由ではなかったことを思い知らされたのです。

今でこそ、イエス様に頼ることが少しずつできるようになってきましたが、何でも自分の力でやろうとする性質は、少しも変わりません。イエス様に頼りきることができず、自分の力と計画で、なんとか成功させようと、知らないうちに邁進しています。最近は、早めに愚かさに気づかされるようになってきてはいますが、倒れるまでやらないと分からず、周りの方に迷惑ばかりかけ、つくづく祈りの少ない者だと思わされています。

熱くなったり、なまぬるくなったりを繰り返し、メサイアの練習で主に引き戻されては、終わるとまた、なまぬるくなる私は、世の多くの結婚生活の破綻の現実や、他人と理解し合うことは不可能という思いから、独身で良いと考えていました。イエス様以外のものに癒しを求め、忙しく楽しい仕事、大好きな陶芸、愛する家族や友人などに充分満足で、結婚への憧れなどは皆無でした。

ところが、昨年の始めから一つずつ順番に主の力によって取られ、ある日ぽっかり穴があいたように感じました。その時の激しい孤独感は、今まで経験したことのないものでした。私が握り締めていたものは全部にせものだった、イエス様しか本物はなかった、と体験したのです。独りでは生きていけない、独りでは自分が信じるものさえもすぐに見えなくなってしまうと思わされた時、初めて生涯心の底から信頼でき、共に祈り合える男性を与えて欲しいと祈るようになりました。強いと思っていた自分が、本当は弱すぎるほど弱い者だと示されて、主に感謝しています。永遠に変わることのない、本当の生きる指針を両親を通して示してくださったイエス様に心から感謝し、御名を心から賛美致します。

1974年東京生まれ。大穴小、大穴中、津田沼高、恵泉女学園大学卒。共栄窯セラミックアートスクールで常滑焼を学ぶ。エスシーエス・ネットワークス社勤務。父 泰治さん、母 和子さん、弟 拓巳さん、妹 麻紀子さん。(この「証し」を書いた後、山本京亮さんと結婚しました。)

イエス様、ついて行かせてください！

小池 正悟

今でこそ、日曜日の礼拝や福音集会、家庭集会などに出ることは私の大きな楽しみですが、初めはそうではありませんでした。私は物心ついたころから母が集っていた吉祥寺キリスト集会の日曜学校へ通っていました。イエス様はいらっしゃると堅く信じ、食事の前には祈り、日曜学校に行っていましたが、自分がほんとうに困った時以外は、イエス様に祈ったり、聖書のみことばに頼ったりはしませんでした。それどころか、学校の友人に自分が神様を信じていることを知られるのを恥ずかしく思い、信じていることを素直に喜べないところがありました。「イエス様を信じて救われたのはいいが、深入りはしたくない」。幼いながらも、そういうところがありました。

彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。

（ローマ 1・21）

後に、このみことばに出会ったとき、「ああ、これは自分のことだ」と思いました。

そして、高校3年生になったとき、転機が訪れました。そのころ、家庭内のことや人に心を開けない自分に対してやり場のない思いを抱えていました。イエス様は私の心に「渇き」を与えられたのです。

そんなころ、誘われて御代田の「若い人のためのバイブルキャンプ」に参加しました。日曜日の礼拝がやっとだった私でしたが、なぜか出てみようと思ったのです。そこで出会った若い社会人や学生の信者の方々は、静かだけれども透明で暖かい雰囲気に満たされていました。ただ集って語り合っていたのですが、その内容は、私がすでに頭で知っていたことばかりでした。

しかし、その方々と私の間には決定的な差がありました。それは、単純に「主イエス様を信じていることを喜んでいる」かどうかの差でした。私はそれまでの自分に



西軽井沢国際福音センターで行われた結婚式で、妻の久美子さんと

「単純な喜び」が全く欠けていたことがすぐに分かり「このようになりたい」と思いました。今までぼやけていたものがはっきりと見えてきました。信仰に深入りすることは束縛されることだと思っていましたが、その思い込みこそが不自由のもとであったことを、イエス様は、目の前で喜ぶ人々の姿を通して見せてくださったのです。それからは、聖書のみことばが心に染み通るようになりました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ 2・20）

イエス様に背を向け、信仰を恥じてさえいた私のために、イエス様は貴いいのちをお捨てになられたのでした。その事実に圧倒されました。それは何度も聞かされてはいたのですが、今、まったく新しく知ったかのようでした。自らの選択ではなく、一方的な憐れみにより選び出され、私は救い上げられたのでした。そうであれば、無条件にイエス様に従うのは当然だ、と気がつかされました。「ついて行きます」ではなく「ついて行かせてください！」という思いでした。

やがてイエス様は、市川に新しい集会を起こしてくださいました。大学進学、就職、米国への転勤など、その後の人生のどの場面でも、イエス様は私をキリスト集会に強く結び付け、守ってくださいました。

2003年、妻の久美子と結婚するという恵みをいただきました。聖書は、夫は家庭を治め、妻を自分のように愛すること、妻は夫に従うことを求めています。私たちの結婚生活は、まだ日が浅いのですが、必要なことは互いに愛し合うことであると日々気づかされています。このことは、集会生



結婚式の後、両家の親族および集会の方々と。後列、左から5人目、小池正悟さん

活における信仰の歩みでもまったく同じで、「まことの愛は自分自身にはないが、祈ればイエス様からあふれてくるのだ」と実感しています。

何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。（1ペテロ4・8）

私たちの間には、愛そのものであるイエス様がいてくださいます。イエス様がこの先の私たちをどのように導いてくださるのかと思うと、本当に楽しみです。

今、私たちは、かつて自分が通った中高生会で、ご奉仕をさせていただいています。若いころにはいろいろな体験をしますが、イエス様以外に私たちを完全に満たすことができるお方はありません。このことを、一人でも多くの若い方々に知っていただきたいと心から願っています。

1973年台湾台北市生まれ。千葉市長作小、幕張中、習志野高、流通経済大経済学部卒業後（株）オークテクノロジー、（株）NDRを経て現在サーヴァンツ・インターナショナル（株）勤務。

イエス様、大好き！

小池 久美子

「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」（1コリント2・9）

2003年の夏、このみことばとイエス様に導かれて、夫の正悟さんと結婚しました。この結婚は、思い描いていたものとはまったく違った新しい創造でした。ただイエス様の一方的な愛と恵みと赦しによって与えられた結婚でした。

独身時代、私は結婚するためには、「堅実にお金を貯めて、自分のわがままを直し、愛をもって相手の役に立つ人間に変わらなければ」と思っていました。

幼稚園での仕事は、まさに「愛することを学ぶための訓練だ」と思い、喜んで就職しました。子供たちのために祈り、成長を見守れることも楽しみでした。

しかし、大学で習ったことと現実のギャップに心が痛んで悩むようになり、自分の正しさを主張して、心はいつしか高ぶりやねたみでいっぱいになっていました。また、自動車事故に遭い、貯金も失いました。さらに腰や手の靱帯を痛めた後、胃腸炎や目まい、急性難聴を次々に患い、治そうと努力すればするほどひどくなり、立ち上がるのもやっとの状態になりました。

そして2001年10月、私は1年半の間一生懸命に育てた可愛い園児や大好きな先輩、同僚を残して休職することになりました。この休職期間中は孤独でしたが、主イエス様の前に静まって祈り、聖書のみことばだけに頼って生かされるために必要な時でした。

主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。（詩篇 37・4、5、7）

「聞け。ラマで聞こえる。苦しみの嘆きと泣き声が。…子らがいなくなったので、その子らのために泣いている。…あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。――主の御告げ。――彼らは敵の国から帰って来る。あなたの将来には望みがある。」（エレミヤ 31・15～17）

いつも頭を下げて、苦しみながら祈り、イエス様に打ち明けると、聖書のみことばを通して慰めと約束を与えてくださり、平安になりました。人に苦しみを聞いてもらい、理解してもらっても、私の心は慰められませんでした。私の罪を赦すために十字架にかかってくださったイエス様のみことばしか、この身と心を満たすことはできませんでした。

「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。」（エレミヤ 17・5）

いつの間にか、イエス様に頼ることを忘れ、自分の知識、愛、努力などを信じて、自分の考えが正しいと主張し、それを貫くことを生きる目的にしていたのです。悔い改め、イエス様にすべてをゆだねて、お任せする決心をしました。

2002年2月退職して10カ月後のクリスマスに、ある方から「幼いときから神様にずっと祈ってきた幸せな結婚の夢が叶えられなくとも、全てを失ったヨブのように、主は真実な方だと、主の前にへりくだれますか？」と尋ねられ、私は「はい。もう一度主の前にへりくだりたいです」と答えていました。とても平安に満たされました。

2003年1月の元旦には**「愛は神から出ているのです。」（1ヨハネ 4・7）**というみことばに出会いました。その1週間後に、正悟さんから「会って大事な話がしたい」とメールがきたのです。愛することを学ぶことに失敗して全てを失った時に結婚の話が与えられました。主の時は完全でした。

実は10年前に正悟さんの証しを聞いたときから、結婚相手なのではないかと密かに祈っていたのです。私の思いや感情は移ろいやすく目に見えるものに心を奪われます。しかし主のみことばの約束は永遠で真実でした。みことばの約束通り、心の願いを叶えてくださったのです。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者は、あわれみを受ける。（箴言 28・13）

そして、2人で参加した2月のロサンゼルスよろこびの集いで、イエス様は悔い改めの答をくださったのです。直っていたはずの目まいがして寝込んだのです。その時初めて、この病気は、他の人を受け入れようとしないことや自分のことを良く見せたいという自我が原因であった、と気づかされ、「今まで人のせいにしていてごめんなさい。主よ、新しく生かしてください」と必死に祈りました。

あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかげることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。（イザヤ 60・20）



結婚式で、ご両親と

翌日、このみことばによって、救われた確信が強められました。「イエス様大好き！」と言っていました。

私は自分の失敗を恐れ、自分の醜さを隠すために沢山の努力をしてきました。しかし、努力では解決できなかった病気を通して、人を愛し何かを与えるどころか、かえって自分からは悪意やねたみしか湧いてこないし、自分のことしか考えられない者だということを徹底的に教えてくださいました。もう頑張るのはおしまいです。そして、自分の惨めな状態をイエス様の前に正直に告白すると、罪を赦してくださり、愛で私の罪を覆ってくださり、豊かに愛を与えてくださるお方だという確信が与えられました。大きな喜びです。自分を繕うことなしに結婚生活ができることはとても幸せです。同じ土台にたって祈れることも感謝です。主はすべてを備えてくださいました。ハレルヤ！

1977年広島県生まれ。石神井小、中、国立音大付属音楽高校、国立音大音楽教育学科卒。富山まどか幼稚園勤務の後、正悟さんと結婚。

イエス様と共に歩む喜びと平安

吉田 信夫

2002年2月、フランスの設計事務所で働くために渡仏した私は、その年の秋にどうしようもない孤独感に襲われました。週末で仕事にも行かず、独り家で過していた時でした。言葉が通じないことによる周りとのコミュニケーション不足のためか、あるいは夏休みを日本で1ヵ月ほど過した後でしたのでホームシックにかかったのかもしれません。理由は幾つか見当たるのですが、とにかく辛いとしか言いようがない状態でした。そんな時、一つの文章を読むことができました。それは以前に吉祥寺キリスト集会の方から送られてきた「孤独病を癒す薬」という題名の文章でした。そこには、孤独病を治す薬として「神様に愛されていることを味わい知る、まことの交わりを持つことこそがその薬である」と書かれていました。まさに、私が忘れていたこと、その時の私に必要なことでした。そして、この文章を通して主との交わりを復活させることができた結果として、また元気になりました。

私は18歳の時に信仰を持ちました。正確に言いますと、両親がクリスチャンでしたので、ものごころついた時から家の近くの教会に通っていました。聖書のこと、イエス・キリストのこと、罪のこと、またその贖いの十字架のこと、大体のことは小さい時から聞かされて知っていました。しかし、17歳の時、両親から洗礼を受けるように勧められた時には、ちゅうちょしました。自分はまだ罪の問題を解決できていない、自分には洗礼を受ける資格はない、と内心思っていたからです。が、結局は受けることにしました。私たち家族が教会からキリスト集会へ移った頃のことでした。そして18歳になった1990年12月23日、吉祥寺の集会場で受洗しました。その直前まで悩みましたが、まさに水につかろうとする時、自我をそのままイエス・キリストに明け渡そうと心の中で祈ることができました。それが自分の信仰の始まりとなりました。



その時読まれた聖書の個所の一つは次のみことばでした。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。　（ローマ 8・1）

今思えばこれは罪の問題の解決、救いそのものでした。ただ、そこで完全なキリスト者になったわけではありません。自分自身の性格をみると、自己中心でなによりも人から愛されたいと強く望む者です。この性質は今でもしっかり持ち続けています。

私には一つ年上に兄がいるのですが、高校生になっても喧嘩ばかりしていました。妹や弟に対しても、ちょっとしたことで怒り、妹であっても追いかけて暴力をふるうような者でした。心の奥に、何かむなしさを抱えていたからではないか、と思います。それだけではなく、両親にも歯向かい、暴力をふるう者でした。今でもはっきりと覚えているのですが、喧嘩の最中に、父から「もうお前のことなど分からない。」と言われたことがあります。その時はっきり分かったのですが、それは心のどこかに父に対して自分のことを認めて欲しい、理解して欲しいという欲望があったのです。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

（マタイ 11・28、29）

このみことばを通してイエス・キリストは、罪を含んだそのままの状態で自分の所に来ていいよ、とおっしゃっていて下さることが分りました。それを知った結果として、暴力をふるわなくなり、またそのことを謝ることができ、家族一人一人を愛せるようになりました。このように主は私の負の部分でさえ用いて私を導き、励まして下さいました。

フランスでの生活も守られていて、不思議と必要なものは全て与えられています。時々落ち込むことはありますが、色々なことを通してまた歩き出せるのも事実です。自分は独りではない、主イエス・キリストご自身が共に人生を歩んでいてくださると知ることは、正に喜びであり平安であります。

1972年滋賀県生まれ。春日部市立上沖小学校、大沼中、越谷高、千葉大学工学部卒。現在パリ在住、ATELIERS JEAN NOUVEL 勤務。

イエス様こそ、幸せに至る道

長岡 慧

僕は寂しがりやで、いつも「孤独」を感じていました。家庭や友人に恵まれなかったわけではないのですが、心に巣食うこの感情は、時間が経つにつれて僕を侵食していきました。この「孤独」に対抗するために、僕は人に評価される人間になろうとしました。自分に対する他人の賞賛は自分に対する好意につながるだろう、そう思ったからです。しかしながら、僕は人としての魅力に乏しい人間です。誰かに好かれたい、認めてもらいたい、そういつも考えているのに、現実は全く逆で、どうしても僕の周囲には人が集まってきませんでした。しかも当時から僕は自分に魅力がないことをよく知っていましたので、この現実を直視する時、自虐的になることもしばしばでした。結局のところ、僕は誰かの愛を間近に感じたかったのです。でも感じることはできませんでした。どうあがいても無理でした。僕にとっては「幸せ」とは「愛されていることを感じられること」でしたから、あがいた結果、さらに肥大化した「孤独」にさいなまれました。これが悪循環であることも、よく知っていました。けれども、他にどうしたら良いのか、さっぱり分からなかったのです。

僕と僕の家族は、僕がまだ幼い頃に一家そろって、このキリスト集会に集うようになりました。しかし中学、高校と年齢を重ねるにつれて、イエス様と僕個人の関係は不明瞭なものとなっていきました。イエス様が現実におられることは何となく感じていましたし、疑う気持ちもありませんでした。ただ、僕個人とイエス様の一対一の関係となると、知識としては知っているのですが、どうもピンとこない、なにか薄布を一枚隔てたようなそんな感じがしていました。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。　（エレミヤ 17･9）

転機は僕が「自分は自分自身のことしか考えていない」ことに気付いたときでした。友人との人間関係がきっかけとなり、僕は僕の言葉や行動が知らぬうちに他人を傷つけていることに初めて気付きました。その時、自分は自分のことしか考えていなかった、自分さえよければそれでいい、そうとしか考えられない自分に気付きました。愕然としました。自分の汚さに身震いがしました。人に好かれるよい人間でありたい、と望んだのに現実の自分は自分に対する自信と驕りで一杯でした。

人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。　（エレミヤ 17･5,7）



ドイツのよろこびの集いで。右側の前列、長岡さん

なぜ僕にイエス様が必要なのか知りました。知識としてのイエス様は幼少の頃から表面的にはよく知っていましたが、「イエス様が個人的にこんな僕を愛してくださっていたし、これからも愛してくださる」ことと「自分の汚さ、真っ黒な罪のためにイエス様が十字架について下さった、そのことによってこの罪が赦されている」ことを確かな体験を通して心から知ることができたのです。また、「これからはイエス様に頼って生きていける、独りじゃないんだ」という明確な将来への希望を持つことができました。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。　（イザヤ 43･4）

イエス様を知る前と知った後で、僕自身の性格は全く変わっていません。イエス様を知った今でも、自分自身の能力で物事を解決しようとしてしまいますし、「孤独」に心を奪われることも度々あります。他人の顔色ばかりうかがって行動してしまうことも変わりません。人を傷つけてしまうことさえあります。変わったのは、そのようなどうしようもないこの自分を、真心から愛してくださる方がいることを知ったことにより、どんなに苦しいときもつらいときも、また弱いときにも、何とか踏みとどまって、この人生の道をイエス様と共に歩んでいける、という希望を持つことができたことです。そして、このイエス様こそが唯一の「本当の幸せに至る道」だと確信しています。

幸せに至る道、それは自分の罪を認めて、へりくだってイエス様に頼って歩んでいく道である、それが唯一の道である、と今、言うことができます。

1983年長野県生まれ。東条小、松代中、県立屋代高卒。東京大学薬学部在学中。父 健次さん、母 伊津子さん、妹 由希子さん。

主は生きておられる

片桐 喜央

私は生まれたときからキリスト集会に通っています。両親がイエス様を信じ、集会に集っていたからです。

キリスト集会の日曜学校には毎週出ていて、毎回聖書の話、イエス様の話を聞いていました。そして、イエス様はやさしい方、いつも私を助けてくれる方だと思っていました。でも、そういうことを集会の友だちと話し合ったり、イエス様を知らない友だちに伝えたりすることはしていませんでした。

そんな私でも、小学生の頃は、悪いことをしたときは、いつもイエス様に「ごめんなさい」とあやまって祈っていました。お祈りの後に「アーメン」とも言いました。

しかし、中学生になった頃から、だんだん祈って赦してもらうことをしなくなりました。祈ることが少なくなっていったのです。友だちのいる集会へは行きたくて行くのに、日曜学校の先生の話を聞くことを怠けるようになりました。それが良くないことであると分かっているのに、またイエス様への思いも変わっていないのに、改めることができないのです。「もっと遊びたい」という気持ちに負けていました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

(ローマ 7・15〜19)

そんなとき、両親と一緒に「ドイツよろこびの集い」へ参加することになり、ドイツで洗礼を受けることができました。ドイツで知り合い、親しくなった友だちが「受洗する」と言うので、「自分も」と急に決意したのです。そのあと多くの方々から「おめでとう」と言われ、ドイツで受洗できたということは本当にイエス様の恵みなのだと思いました。洗礼を受けても、つい良くないことをしてしまう自分の中の罪の性質は消えませんが、イエス様を悲しませるような行いを、少しでも減らしたいと願っています。



ドイツよろこびの集いで洗礼を受けて。右、片桐さん

私の集っているキリスト集会では、イエス様に出会ったいきさつや、イエス様からいただいた試練、喜びなどを「証し」することが行なわれます。大人だけではなく、高校生や中学生でも「証し」を頼まれます。そして、もし自分が頼まれたら断ろうと、ずっと思っていました。「証し」をしたら、みんなから、いろいろ言われるだろうと思ったからです。

ところが、実際に今度、「証し」を書くように頼まれたとき、断る口実が思い浮かばずに引き受けてしまいました。

でも、なかなか書く気になれません。提出期限の1ヶ月後になって、やっと「何を書こうか」と考え始めました。そして、「証し」を書くために、聖書をたくさん読みました。他の人が書いた「証し」も、ふだんは全く読まないのに、たくさん読みました。そして、聖書を読んでいるうちに、自分が聖書に従っていないこと、そのために自分だけでやろうとして失敗したこと、などを思わされました。一人で聖書を読むことが、とても大切なんだ、ということを知りました。最初はいやだと思うことも、祈ってすればいいんだ、ということも教えられたように思います。

「証し」を頼まれたこと、断る口実が思い浮かばなかったこと、その結果、聖書をたくさん読むことになったこと、すべてがダメな私に対するイエス様のご配慮、導きであった、と感謝しています。

主は私のような者にも、生きて働いてくださっている、と実感しました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。　(伝道者 3・11)

主に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。主に身を避けることは、君主たちに信頼するよりもよい。

(詩篇 118・8、9)

1986年東京生まれ。東条小、松代中卒、現在屋代高3年。父 俊文さん、母 千雅子さん。

離婚、再婚の問題について

ゴットホルド・ベック

私たちが離婚、再婚の問題に対したとき、大切なのは、「人間がこの問題についてどう考えるか」ではありません。「主なる神が何を考えておられるか」だけが大切です。私たちは、主なる神の言葉の権威を認め、従わなければなりません。

聖書の権威について、真理そのものである主イエスは、次のように言われます。

「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」　（マタイ24・35）

「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅び失せない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。」（マタイ5・18）

聖書にあるすべての主の言葉は、その言葉の「一点一画」、つまり綴りや語順に至るまで、決してすたれることはないと、主イエスは言われます。

聖書に書かれてあることは、一点一画に至るまで真実です。もし、私たちが主の言葉を信じようとしないなら、私たちは主と人間に対して罪を犯すことになります。もし、聖書に書かれてあることが真実でないとしたら、聖書は私たちにとって何の役に立つでしょうか。もし、聖書の権威に迷いがあるようなら、私たちは聖書の言葉を信じることができなくなり、人間の判断や理解の方が聖書よりも権威を持つようなことになりかねません。主の言葉を部分的には読み取るが、「一点一画に至るまでが神の言葉通り」に受け取らない聖書の読み方は、私たちの信仰の岩のような基礎となることはできません。

しかし、主に感謝しましょう。なぜなら、「主の言葉」に刃向かう反論や闘いは、未だかつて成功したためしがないからです。

今の時代に、まさに当てはまる主の言葉が聖書にあります。

終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。　（2テモテ3・1-5）

この主の言葉によると、終わりが近づいたこの世には、自分を愛し、両親に従わず、汚れたことを行ない、和解しようとしないで争う人々であふれます。

現代の多くの人々は、主なる神を恐れず、主に逆らっています。男は女を思いやらず、女は男に逆らい、子どもは親に逆らいます。多くの人々が満たされず、孤独で、心に悩みを抱き、どうしようもなくなっています。

主の恵みによって救われた者も、もし聖書の言葉に従おうとしなければ、御霊に導かれようとしなければ、未信者とまったく同じようにこの世に妥協し、知らないうちに神の敵となってしまいます。



離婚、再婚の問題について

ところで、幸せな結婚生活の秘訣とは、何でしょうか。
結婚した相手を愛し、相手を助け、相手を幸せにし、自分を虚しくして相手に仕え、たとえ相手が間違っていたとしてもそれを許す、という態度をとることこそが、幸せな結婚生活の秘訣です。
自己否定を伴わない結婚は、悲劇です。
自己中心、自分優先、自己満足を追い求める生き方は、不幸の原因です。
自分のためだけに好き勝手に生きることは、悲劇を招きます。
誰でも、自分自身のために生き、自分が中心になりたいと思い、自分自身の願望を追及したいという思いを持っていますし、それを実行することは可能です。私たちの最大の敵は、私たち自身の自我、私たち自身の欲望にあります。



また、多くの人々は、愛しあってさえいれば結婚前に親しい関係を持って当たり前だ、いずれは結婚するのだから、と考えています。しかし、神の言葉である聖書は、結婚するまで待つべきであるときびしく戒めています。結婚する前に親しい関係を持つことは罪となります。結婚してからそうなることこそ、主のみ旨であり、みこころです。
親は、子どもがそのようなことをしそうなときには、いのちがけで反対すべきです。なぜなら、そのような結婚は、決して主に祝福される結婚になりえないからです。子どものわがままは、絶対に許してはいけません。主が許されないからです。
また、結婚がうまくいかなければ、離婚という逃れ道がある、と考えている人もいます。昔の一部の聖書学者たちも、そう思っていたようです。

パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているでしょうか。」

イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、「それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。」と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」彼らはイエスに言った。「では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。」イエスは彼らに言われた。「モーセは、あなたがたの心がかたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったのではありません。まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。」

（マタイ19・3-9）

主イエスは、結婚したふたりは、「もはやふたりではなく、ひとりである。」と言われただけでなく、はっきり「神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」と言っておられます。また、当時の聖書学者たちは、主イエスの揚げ足を取ろうとして「モーセは命じた」という部分的な箇所を持ち出したのですが、主イエスは、それは「命じたのではなく、許したのだ。」と言われました。つまり、

離婚、再婚の問題について

「モーセは、彼らの心がかたくななので、何を言っても聞く耳がないから許しただけなのだ。」と解き明かされたのです。同じような例は、放蕩息子の箇所に見ることができます。父親は、放蕩息子が家族と離れ、家を出ていくことを、一度は許したのです(ルカ15・13)。なぜなら、聞く耳がなければ留めようがないからです。

しかし、主ご自身は、厳然として次のように言われます。

「わたしは、離婚を憎む。」とイスラエルの神、主は仰せられる。……裏切ってはならない。 (マラキ2・16)

また、パウロは、次のように書き記しています。

次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。——もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい。——また夫は妻を離別してはいけません。 (1コリント7・10、11)

妻は夫が生きている間は夫に縛られています。しかし、もし夫が死んだなら、自分の願う人と結婚する自由があります。ただ主にあってのみ、そうなのです。 (1コリント7・39)

この「主にあってのみ」の意味は、「主にある者同士のみ」、ということです。つまり、「未信者と結婚してはいけない」という意味です。

夫のある女は、夫が生きている間は、律法よって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとい他の男に行っても、姦淫の女ではありません。 (ローマ7・2、3)

聖書ははっきりと、「ひとたび結婚した相手が生きている限り、他の人とは再婚できない」と規定しています。結婚は、死ぬまで続く、主によって定められた厳然とした関係です。「結婚」は私たちの人生でもっとも大切なものであり、同時に、不用意に取り扱うと結果が苦難に満ちたものにもなりえます。多くの人々は、間違った結婚によって、一生涯不幸に苦しんでいます。

聖書が「結婚」について、どのように言っているかを、ここで確認しておきましょう。

結婚は、ひとりの男子と、ひとりの女子の間の、一生解かれることのない結びつきです。「結婚したふたりは、どちらかが召されて離れるまでいっしょであり、ひとつである」。このことを、よく心に銘じなければなりません。たとえ、貧しくなっても、病気になっても、ふたりはいっしょです。年を取り、からだが不自由になっても、また性格に合わないところがあっても、ふたりはいっしょです。結婚は死ぬまで続くのです。

「自己否定によって主イエスが私たちを通して常に自由に働くことがおできになるか」、あるいは「自分自身が中心となって主イエスをのけものにするか」。この二つのうちのどちらを選ぶかによって、結婚は幸せにも、不幸にもなりえます。

また、聖書には「子どもは親に従うべきである」とあります。しかし実際には、何と多くの親が子どもに従っていることでしょうか。子どもは自分勝手に結婚する相手を決め、親と相談せずに結婚する日を決めてしまいます。そして多くの親は諦めています。

また、未信者との結婚は、許されていません。「未信者と結婚したい」と、たとえ子どもが願ったとしても、主の光のうちに歩む親なら、決して祝福することはできません。相手の人が主のもとに導かれ、はっきりと主を受け入れ救われるまで、何年間でも待つべきです。もし子どもが聞く耳を持っていなければ、自分勝手に市役所へ行って籍を入れてしまうかも知れません。しかし、主に祝福されない結婚がどうなるか、その結果は言うまでもありません。主はきびしいお方です。そのきびしさは、あふれるばかりの愛の現われなのです。



いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖ととなえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。」 (イザヤ57・15)

「わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。」 (イザヤ66・2)



わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。
（ヨハネ　14･27）

イエス様は、十字架上で死なれる直前に、愛する弟子たちと食事を共にしました。その時、同席していた使徒ヨハネは次のように記しています。「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。夕食の間のことであった。」（ヨハネ13・1、2）最後の晩餐として有名なその席で、イエス様は「わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。」と言われました。

また、十字架にかかり、３日後によみがえられたイエス様は、弟子たちのところに来られ、「平安があなたがたにあるように」と２度も言われました。

その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。」
（ヨハネ20･19～21）

イエス様はなぜ「平安があるように」と言われたのでしょうか。なぜなら「主の平安」こそが、人間にとってもっとも必要なものだからです。そして、イエス様ご自身が言われたこの「平安」こそ主なる神の愛（いつく）しみの中心をなすものだからです。

それゆえ、主イエスが言われたのは、十字架の死が刻一刻と迫ってくるときでした。私たちを罪の束縛から解き放つために、私たちの身代わりとなって、罪そのものとして十字架に断罪される直前だったのです。

さらに、イエス様が「平安があなたがたにあるように」と繰り返し言われたのは、

約束されたよみがえりのいのち、永遠のいのちとして復活された直後だったのです。

イエス・キリストの十字架の贖罪の死と、永遠のいのちとしての復活は、万物の創造主なる、唯一の真の神の救いの中心をなすものです。すなわち、人がかたくなな心を砕かれて、心の眼(まなこ)が開かれ、悔い改めて神ご自身との正しい関係、神ご自身との平和の関係を回復させられるという、主の救いの、福音の中核をなすものです。

それゆえにイエス様はあえて、十字架の死の直前に、そして、復活の直後に「平安があなたがたにあるように」と繰り返し言われたのです。

「平安」は人間にとって、主なる神の救いの産物であり、必要不可欠な属性です。もっとも大切なものであります。預言者イザヤは記しています。「『平安あれ。遠くの者にも近くの者にも平安あれ。わたしは彼をいやそう。』と主は仰せられる。」（イザヤ57・19）と。

そして聖書はこの「平安」（イエス様が「わたしの平安」と呼んだ）が主なる神からイエス様をとおして、弟子たちに与えられると約束しているのです。すなわち、イエス様の救いに与った者たちに、救われたキリスト者たちに与えられる「神の愛(あわれみ)」であると明言しているのです。

「平安」は神の愛の一つの証しです。結論的に言うならば、主なる神の、主イエスの与えてくださる「平安」は、主の言われたとおり、この世が与える平安とはまったく違うものです。なぜなら、イエス様の与えてくださる平安は、十字架上で死なれ、復活されたイエス様を見て喜ぶ者に結果として与えられるものだと福音書が記しているからです。

イエス様は、かつて言われました。そして今も言い続けておられます。神の救いの招き、呼びかけとして、これからも言い続けられます。聖書でもっとも有名な聖句(みことば)です。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。（マタイ　11・28、29）

イエス様はここで、「わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます」と語られました。主の言われる「たましいの安らぎ」は「わたしの平安」と同義語と言えるでしょう。一言で言うならば、主イエスの与えてくださる平安はどこからもたらされるかというと、「心やさしく、へりくだっている」信仰の創始者、完成者であるイエス様の信仰の姿勢からです。そして、イエス様のこの地上を歩まれた生涯の「心やさしく、へりくだった」信仰の姿勢の集約が、その象徴が十字架の祈りです。

そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ　23・34）

イエス様はここで、自分を十字架につけて磔刑(はりつけ)にした人々の赦しを、父なる神に祈られたのです。そして父なる神は、ひとり子のイエス様をすべての人々の身代わりとして断罪することを、すなわち贖罪の死をゆるした方です。ここにイエス様の「心やさしく、へりくだった」信仰の姿勢とその内実を発見します。

最後の晩餐の時、使徒のひとりであるイスカリオテ・ユダがご自身を裏切ることを主はご存じでした。しかし主は「平安を残します。わたしは平安を与えます。」と言われたのです。そして、ユダの裏切りによって捕らえられる時も、イエス様はユダを「友よ」と呼ばれたのです。その後で、イエス様が捕縛されたのを見た弟子たちはみな、イエス様を見捨てて逃げてしまったのです。それから、攻撃と迫害に遭われました。しかし、主はイザヤの預言どおり、何も言わず黙って自ら十字架を負ってゴルゴタの丘を登られたのです。

イエス様にとって十字架にかかることは恥辱そのものであり、絶望的な苦しみだったのです。しかし、イエス様は祈りました。「父よ。彼らをお赦しください。」と。どうしてイエス様は苦しみと悲しみの果てで、このような祈りを祈りえたのでしょうか。主イエス様は「心やさしく、へりくだっている」方だからです。

イエス様は、十字架にかかられる直前



平安を与えます

に凄絶な祈りを父なる神にしています。

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」・・・イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。
（ルカ　22・42～44）

人としてのイエス様にとって、十字架にかかることは、汗が血のしずくとなるような苦しみでした。なぜならその時は、み父から棄てられることを意味していたからです。

3時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という意味である。（マタイ　27・46）

しかし、イエス様はこの絶望的な叫びにもかかわらず、最後には次のように祈られたのです。
イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。（ルカ　23・46）

イエス様はどうしてこのような祈りをそのご生涯の最後に祈りえたのでしょうか。主イエスは「心やさしく、へりくだっている」方だからです。人が罪を犯したら、7度を70倍するまで赦しなさいと言われたれた主は、どこまでも赦す方、父なる神に私たちの赦しをいつまでも祈り続ける方です。すなわち「心やさしい方」です。主の心は無限の赦しで満ちています。そして、イエス様はどこまでも父なる神に従順であり、何があったとしても完全に信頼し、最後まで服従される方です。人の目には十字架に「棄て去られる」ときもです。すなわち、「へりくだっている」方です。だから、私たちが主を見て喜ぶとき、神の「平安」が与えられます。

そして私たちがイエス様の信仰の姿勢に近づくことができ、それに与るときに「平安」が私たちにあるのです。イエス様が与える「平安」とは、「たましいの安らぎ」であります。主イエス様の信仰の姿勢にならった「心やさしく、へりくだった」態度です。それは信じる者だけが、救いの実として与ることができるのです。ですから主の言われる「わたしの平安」とは、「心やさしく、へりくだる」ことであり、それは、無限の赦しと主なる神への徹底した完全な服従から生まれてくると分かります。このことについては、イザヤも預言し、ペテロも手紙に書いています。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。・・・彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。・・・しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。・・・彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。
（イザヤ　53・5、7、10、12）
キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。（1ペテロ　2・22、23）

イエス様が与えてくださる「平安」は、イエス様の徹底した自己否定と自己犠牲から生まれたと分かります。ですから私たちがこの神の「平安」に与る喜びの秘訣とは、意識して自分を無視すること、主にあって積極的に自分を卑下し、否定することにあります。

最後にイエス様の「平安」に与った者の証しを記して終わります。

悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。
（2コリント　6・10）

染野茂夫
東京都出身。
早稲田中学・高校卒業、成城大学文学部卒業。
現在、羊の家（株）顧問





定年後の祝福された生活



あなたは老後の生活に思いを巡らせたことがありますか。現役を引退した方でしたら、今の生活をどう思っておられますか。サラリーマンを卒業した人からは「定年前、あれもしたい、これもしたいと楽しみにしていたことが、ほとんど実行できないでいる」といった声を聞くことがあります。聖書のみことばのとおりです。

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。（箴言　16･9）

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。（箴言　19･21）

私も定年退職して3年半になる身ですが、こうした声を聞きますと、25年前まことの神であるイエス様に出会えて本当によかった、と感じます。イエス様は定年後の私にたくさんの恵みを与えてくださっているからです。その恵みを4つに分けてお伝えしたいと思います。

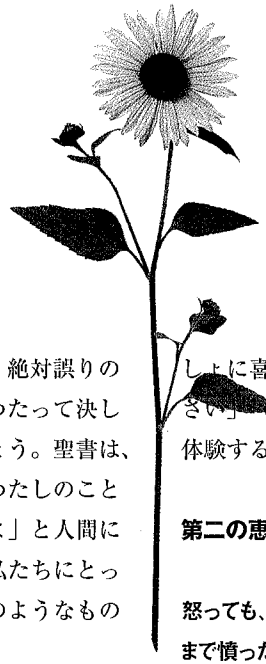


第一の恵み　主イエスとの豊かな交わり

聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。（2テモテ　3･16）

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。（マタイ　18･19）

勤めていた時は時間に余裕がなく、ついおろそかになりがちでしたが、今は毎日、朝ごとに、夕ごとに夫婦で心を一つにして、聖書を読み、黙想し、祈る――主イエスと交わる――時を持つことができます。夫婦が同じ価値観で、同じ方向を向いて生きることは、夫婦が一体となるように造られた神のみこころに適うことです。



しかも、土台となるものが、絶対誤りのないものであれば、将来にわたって決して後悔することはないでしょう。聖書は、人間を創造された神様が「わたしのことばに従って生きれば安全だよ」と人間に与えて下さったものです。私たちにとって生きていくための羅針盤のようなものです。

私はみことばを読むたびに、わがままな私のすべてを赦し、受け入れて下さったイエス様の愛、十字架のみわざに、感謝せずにはいられません。また、主を信じる者は将来、イエス様に似た姿に変えられ、天の御国で永遠に主イエスと共に生きる、という聖書の約束に、大きな喜びと元気と希望が与えられます。

わが家では毎週、ご婦人方の祈り会があり、祈りの後のお茶の交わりに私も加わることがあります。その席で、ある人の悩みを聞いたりしますと、その悩みは私たち夫婦の祈りの課題になりますが、主が祈りに応えて下さり、「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい」（ローマ　12・15）のみことばを体験する恵みに預かったこともあります。

第二の恵み　家庭は主の良き訓練の場

怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。
（エペソ　4･26）

互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。（コロサイ　3･13）

定年後は、夫婦だけで過ごす日が多くなります。主を信じ救われていても、二人とも罪の性質を持っていますから、意見が違ったりして些細なことがトラブルの原因となります。会社では、定年に近い年齢になりますとそれなりのポストに付き、一方的に命令したり、仕えられる立場となり、知らず知らずのうちにそれに慣れていますので、定年後、家庭のことで妻からあれこれ命令されたり、またやりかたが違うと注意されたりしますと、自我がむくむくと頭をもたげ反発してしまいます。結果は、相手を裁くか、「俺はなんと自分勝手な人間だ」と自分の罪を見せられるか、のどちらかです。

会社では、よそ行きの顔で過ごせても、家庭は互いに生まれつきの地のままで過ごす場であります。互いのわがままがぶつかる時に、互いに許し合うことをしなければ、家庭は憩いの場どころか、悲惨な場となります。

しかし、十字架の下にひざまずく時、相手を裁く権利など全くないことを示されます。イエス様は私たちの罪を負い、ご自分が身代わりとなって十字架の裁きを受けて下さいました。私たちに何の代価も求めず、赦してくださったのです。この十字架の愛を受けているからこそ、私たちは相手のありのままを受け入れ、許すことができるのです。

私たち夫婦も、夜の祈りの時になると、互いに自分の罪を認め、主によって和解させられて翌日まで持ち越すことがありません。本当に感謝なことであります。

第三の恵み　喜びの集いへの参加

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。（詩篇　133･1）

ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。（ヘブル　10･25）

聖書は「見よ。その日が来る。……その日、わたしは、この地にききんを送る。……主のことばを聞くことのききんである」（アモス　8・11）と警告しています。今はまだ恵みの時、救いの時です。





私も時間的に余裕ができましたので、健康である今のうちにと火曜日の学び会はもちろんのこと、多くの「よろこびの集い」に夫婦で参加するようにしています。

「自分はひとりで聖書を読み、祈っている。だから主から離れていない」と言って聖日礼拝を守らない人も、まれにいますが、主は私たちが弱い器であることをご存知であるからこそ「いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い・・」と勧めてくださっています。

私たちは知らず知らずのうちに、自分勝手な一人よがりの信仰生活になる可能性を持っています。みことばを自分の都合のいいように解釈し、いつのまにか、主イエスではなく自分が王様になりかねません。信仰の失格者とならないためにも集会に参加し、交わりを持つことが大切です。みことばを学んだり、他の信者の証しを聞いたりしますと、「主は生きて働いて下さっている」こと、「主のなさることは時に適って素晴らしい」ことを改めて知らされ、ますます主に対する信頼が増し加えられます。その結果、私たちはもっと主に頼ろうと祈りに励むように導かれます。

第四の恵み　葬儀への参加

祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者が、それを心に留めるようになるからだ。(伝道者　7･2)

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネ　11･25)

神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいなさい。(ヘブル　13･7)

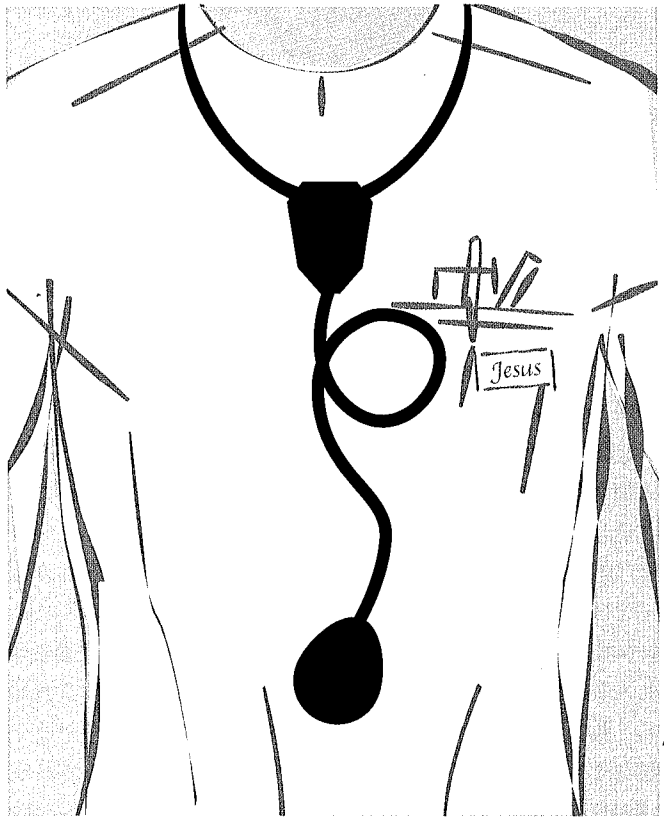
人の死は突然訪れます。私も、死はまだまだ先のことと思っていましたが、考えてみますと、生きて来た時間よりも死までの時間の方がはるかに短いのです。老後は、いかに希望を失うことなく死を迎えるかという、死への準備期間のように思います。

私は定年後、キリスト集会の方々の葬儀に参列する機会が増えました。葬儀の席で、天に召された方の信仰の歩みと結末を見聞きしますと、「死は決して終わりではない」こと、イエス様を救い主と信じ救われた者は、苦しみも悲しみもない天国で永遠に主イエスと共に生きることを、ますます強く確信させられます。と同時に毎日祈っている親族や友人知人が、一日も早く救われて、天国への切符を手に入れて欲しいと強く思います。将来、主に召される時が来た時、パウロのようにこう語ることができたら、どんなにか幸いなことでしょう。

私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。(2テモテ　4･6～8)

辻田浩康
1939年長崎県生まれ。
1963年長崎大学経済学部卒、三菱信託銀行入社。
2000年定年退社。





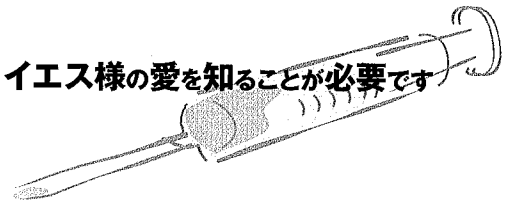
イエス様の愛を知ることが必要です

私たちは、健康な時にはそれを特にすばらしいこととも思わず、当然のように毎日生活しています。病気になって初めて、この厳しい訓練を味わうことになるのです。そして誰でも例外なく、病気という訓練を人生のどこかで経験させられます。病気が苦しいと感じるのは、肉体の苦しみによるものだけではありません。あまり意識しませんが、霊的な苦しみも想像もできないくらい大きなものだと思います。

ここでは２つの霊的な苦しみについて、ご一緒に学んでみたいと思います。１つめは、病気の原因が罪の結果だと思いこんでしまうことです。すなわち、「なぜ私は、あるいは私の愛する家族は病気になったのか。私の何が悪かったのか。この病気は私の罪の結果なのか。私の子どもの病気は親の落ち度があったためではないか。私はもはや神様の愛を失ってしまったのではないか」と考え込んでしまうことです。２つめは、死後の問題です。重い病気で死を間近にしたとき、「私はこれからどうなるのか。天国に行けるのか、あるいはさらに苦しい地獄に行かなければならないのか。私の愛する人々とは、もうこれきり２度と会うことはできないのか」と悩むことです。つまり死後、自分あるいは愛する家族はどうなってしまうのか、という問題です。この２つの問題はどうしても医学では解決できませんし、いわゆる宗教でも解決できません。なぜなら医学が病気に対してできることはほんのわずかであり、この世のいわゆる宗教では「病気の原因は罪である」、「良い行いをしないと天国には行けない」と教えるからです。この２つの問題を解決して下さるのはイエス様だけです。

まず１つめの、病気の原因という問題について考えてみます。聖書の中では、病気の原因について書かれている箇所がいくつかあります。罪によって病気になったミリヤム（民数記12章）のような人もおり、悪魔（サタン）によって病気になったヨブ（ヨブ記１章）のような人もいます。

イエス様の愛を知ることが必要です



そして新約聖書、すなわちイエス様がこの世に来られ、人々に罪の赦しを与えられた時代では、主に「神の栄光のため」に病気になった人々が登場します。病気の原因を罪の結果であると考えるのは、私たちの持って生まれた理屈ではとても理解しやすいように思います。何か悪いことをしたから病気になる、というのは一見筋が通っているように感じます。しかし聖書によれば病気の原因は1つではありません。

またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」(ヨハネ　9·1〜3)

弟子たちは短絡的に罪の結果なのかと考えましたが、イエス様は「神のわざが現われるため」とはっきりと言われました。これこそが、すでに救いが成就された現代において、病気の原因を考える上で最も重要なポイントだと思います。この盲人は後に癒されて目が見えるようになりました。そして「主よ。私は信じます。」と言って主を拝する者となりました（ヨハネ　9·3〜8）。

「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」(ヨハネ　11·3、4)

主の「愛する者」が病気になったとき、主イエス様は神の栄光のため、とはっきりと言われました。そしてこの病気になったラザロという人はよみがえらされ、それによって多くのユダヤ人が神を信じるようになった、と書かれています（ヨハネ　11·45）。

では、病気が治ることのみが神様の栄光を現すのでしょうか。

ある村にはいると、十人のらい病人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください。」と言った。イエスはこれを見て、言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中でいやされた。そのうちのひとりは、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。そこでイエスは言われた。「十人いやされたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」(ルカ　17·12〜18)

人は癒されると、つまり目に見える問題が解決されると満足し、神様から離れてしまいがちです。主は「九人はどこへ行ったのか」と嘆かれました。治ることのみが主の栄光を意味するとは限りません。

事実、病気は治らないけれども神様の救いにあずかり、「神の栄光を見る」方が多くおられます。「神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか」（ヘブル　12·7）とあるように、そもそも病気という試練を与えられることは、神様の愛を失ったからではなく、むしろ子として愛されているということ、また病気が治らないのは神様に愛されていないからではなく、私達はみんな等しく神様に愛されているということです。この事実を覚えることができれば、パウロのように「むしろ大いに喜んで私の弱さを誇る」（2コリント　12·9）と証しすることができると思います。

次に、2つめの、とても現実的な問題について考えてみます。私たちは死後どうなるのか、という問題です。

「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。」（マタイ　18･3）

子どものように素直に神様を信じれば天国が約束されています。聖書を勉強して理解する必要はなく、良い行いをする必要もなく、もちろんお金を払う必要もありません。そうでなければ小さな子どもは勉強もできず、お金も払えず天国に行けないことになってしまいます。神様は実に公平な方です。何も理解できず、何もできない小さな子どもこそ天国に行く、と言われるのです。ある人は生まれつき病気であり、ある人は90歳まで健康に生きる、というこの世の現実は不公平であるかのように見えますが、決してそうではありません。むしろ早くすばらしい天国に行ける方が恵まれているのかもしれません。なぜなら、「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです」（詩篇　90・10）と書かれているように、神様の愛、本当の希望、平安、喜びを知らずにこの世で生きていくことは苦しみそのものだからです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3･16）

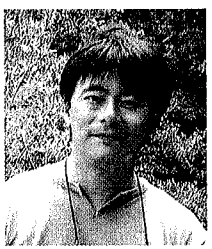
イエス様が罪の赦しを提供して下さいました。私たちは自分の罪（神様は神を知らずに生きることそのものが罪であると言われます）を悔い改めるだけで赦されます。何か良いことをしないと天国に行けない、というのではありません。ただ素直に信じる人には、一人残らず天国が約束されているのです。「主にあって死ぬ死者は幸い」であり、「労苦から解き放されて休むことができ」（黙示録　14・13）、「死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられる」（1コリント15・52）のです。この事実を心から信じることができる人は本当に幸いであり、自分の将来に何の不安もなくなり、「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません」（詩篇　23・4）と言うことができます。

病気においては、イエス様の愛を知ることこそが大切で、病気が治るか治らないか、ということは実はあまり大きな問題ではないのです。主のまことの愛を知れば、治っても治らなくても私たちは何も恐れることはなく、病気が治るかどうかについて、不安な日々を過ごす必要もなくなります。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」（ヤコブ　4･14、15）

何もできない私たちには、神様の前に悔い改め、提供された救いを受け取るという唯一の希望の道が与えられています。病気という厳しい訓練を通して、むしろ神様に愛されていることを知り、神の栄光を見ることができれば本当に幸いです。

辻陽一郎
防衛医科大学小児科助手（小児の血液･免疫･腫瘍専門）。東京学芸大学付属高、東京医科歯科大学卒。同大学病院、都立墨東病院、武蔵野赤十字病院を経て現職。





イエス様の愛を知ることが必要です

メッセージ当番表

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。
（エペソ 6:18）

	6月				7月					8月				
	6日	13日	20日	27日	4日	11日	18日	25日	1日	8日	15日	22日	29日
北海道	藤原N	岩崎	中山Y	岩下	重田H	川股	杉本	芳竹	中山Y		白石K	武井	加藤S
青森		大場		中山Ch	キャンプ	佐山		笠井			藤田E	福島	
仙台／盛岡	立之	蘇畑	川股	菊池	キャンプ	松田	松見	福島	増森		高田	奥	深沢
新潟	松下	笠井		重田H	山下	キャンプ		江藤	冨田			鈴木T	
宇都宮	見目	野田	吉田	御任	藤井	谷口	羽石	鈴木H	川股		見目	谷口	金井
日立土浦／大洗	松田	槙野	藤田T	藤田E	南村	槙野	平山	和田S	柿沼Y		松見	羽石	吉田
川越	岩上	江田	上野	内藤	小野沢	和田Y	古谷	大場	青木		南村	松見	平山
春日部	宮田	西村	会沢	辻	代田	飯島H	川股	古田K	白石Y		御任	野口T	大庭
印旛／鹿島	滝	末村	小西	小川	川股	藤井	鈴木H	小々馬	御任		吉田	大庭	小西
市川	田尾	飽戸	鈴木T	小島	伊牟田	会沢	笠井	松尾	大野		染野	槙野	山口I
東京 10:30	酒井Ch	藤本	重田S	染野	小西	田中J	滝	小川	大場		伊牟田	会沢	大沢A
東京 14:00	高村	岩本	野口H	江藤	白石K	平山	野田	飽戸	池田D	青柳	辻田H	菊池	古田K
東京 19:00	柿沼Y	旭	田中J	佐山	小島	水渡	久田	松見	冨岡	岡本M	石塚	古田稔	蘇畑
横浜	中山Ch	菊池	寺田	黒田	黒沢	辻	浅野	古屋	中山Ch	松田	中村K	野口O	小々馬
相模原	松見	内藤	山田K	立之	兵藤	酒井M	清水Y	大須賀	立之		牧野	山田K	古川
御代田	平井	長岡	松下	野口O	江藤	神沢	飽戸	石井A	加藤S		菊池	旭	酒井M
伊那	片桐	熊谷	長岡	山田M	植原	羽石	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	山田M
富山	江藤	織田	山下	大下	末永	山田M	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	植原
高山		大下		吉田	吉田	柿沼Y	野口O	冨田	仲井間		柿沼Y	松本Y	平
藤枝		芝田		小林	大下	キャンプ		新井				新井	
掛川	染野		岩上			内藤		野田				石塚	
蒲郡	倉橋	清水N	大高	白石Y	酒井		秋本		金子			大塚	
名古屋／豊橋	辻田H	田中J	酒井M	上田	野田	岩本	新井	小西	三五		河辺	辻田H	清水Y
石川／福井		重田S (12)		長岡	山科	滝	今村	和田Y	新井		会沢	津田	松本S
近江八幡	後藤	吉田	高村	高村		キャンプ		平					平
大阪	池島	水渡	中山K	寺田	高村	古田K	高村	高村	高村		青柳	高村	高村
芦屋	長岡	高村	池島	森島	清水Y	那須	広田	酒井Ch	小久保		大場	内田	山科
西神	瀬川	藤田T	森島	久田	片桐	小久保	瀬川	吉田	瀬島		新井	滝	広田
島根	瀬島		黒田R		広田	渡辺S	岡本M	池島	滝		高村	飽戸	小山
山口/広島/徳山	芳我	杉本	岡本M	田中J	古川		福代		古川		岩崎		
岡山	鈴木T	藤原T	後藤	内田H	山口H	笠井	香川	上田	秋本		藤原T	瀬島	若山
坂出	内田H	中山K	高島	古田K	広橋	久田	近森	内藤	野間		渡辺S	内田H	福島

当番表の石川／福井の項目で、担当者名の横に記入した数字は福音集会の開催日です（日曜に会場を確保できず、前日の土曜に開くもの

メッセージ当番表

6月

	6日	13日	20日	27日
徳島	中山K	野間	小野沢	青柳
高知	金子M	大須賀	古田K	近森
松山／西条	白石K	広田	内藤	光藤
福岡／別府	中野	庄野	加藤M	浅野
長崎／佐世保	岩本	辻田M	染野	加藤M
宮崎／小林	古田K	河辺	武井	菅原
鹿児島／熊本	和田Y	加藤M	須藤	平山
沖縄／宮古	蘇畑	喜屋武	岩崎	代田
米国／カナダ				
グアム				
バンコク				
中国				

	4日
徳島	山本
坂出	野間
高知	鈴木T
松山／西条	内田H
福岡／別府	小山田
長崎／佐世保	別所
宮崎／小林	羽石
鹿児島／熊本	庄野
沖縄／宮古	飯守
米国／カナダ	
グアム	
バンコク	

7月

11日	18日	25日
広田	河野	後藤
内田H	会沢	染野
岡本H	飯守	伊野
野間	藤原N	河野
別所	重枝	清水Y
辻田H	加藤M	岩崎
上野	岩本	菊池
江藤	石塚	青柳
仲井間		平良K
	石井A	

8月

1日	8日	15日	22日	29日
笠井		広橋	伊野	池田
広橋		森島	池田	伊野
池田J		池田D	青柳	窪内
江藤		近森	北原	内藤
山口H		滝	松井	野田
別所		庄野	石井A	山口H
染野		平山	藤原N	桜本
古田M		重枝	古田K	上野
松見		平良M	芳竹	青柳
			和田Y	
平山				

9月

12日	19日	26日
菊池	寺田	黒田
内藤	山田K	立之
長岡	松下	キャンプ
熊谷	織田	キャンプ
織田	山下	大下
大下		吉田
芝田		小林
	岩上	
清水N	大高	白石Y
田中J	酒井M	上田
重田S		長岡(25)
吉田	高村	高村
水渡	中山K	寺田
高村	池島	森島

	5日	12日	19日	26日
北海道	藤原N	岩崎	中山Y	岩下
青森		大場		中山Ch
仙台／盛岡	立之	蘇畑	川股	高田H
新潟	松下	笠井		重田H
宇都宮	見目	野田	吉田	御任
日立	松田	槙野	青柳	藤田E
土浦	古谷	南村	青木	青柳
川越	岩上	江田	上野	内藤
春日部	宮田	西村	会沢	辻
印旛／鹿島	滝	末村	小西	小川
市川	田尾	飽戸	鈴木T	小島
東京 10:30	酒井Ch	藤本	重田S	染野
東京 14:00	高村	岩本	野口H	江藤
東京 19:00	柿沼Y	旭	田中J	佐山

	5日
横浜	中山Ch
相模原	松見
御代田	平井
伊那	片桐
富山	江藤
高山	
藤枝	
掛川	染野
蒲郡	倉橋
名古屋／豊橋	辻田H
石川／福井	
近江八幡	後藤
大阪	池島
芦屋	長岡

	5日	12日	19日	26日
西神	瀬川	内田	森島	久田
島根		瀬島		黒田R
山口/広島/徳山	芳我	杉本	岡本M	田中J
岡山	鈴木T	藤原T	後藤	内田H
徳島	中山K	野間	小野沢	北原
坂出	内田H	中山K	高嶋	古田K
高知	金子M	大須賀	古田K	近森
松山／西条	白石K	広田	光藤	和田Y
福岡／別府	中野	庄野	加藤M	浅野
長崎／佐世保	岩本	辻田M	染野	加藤M
宮崎／小林	古田K	河辺	武井	菅原
鹿児島／熊本	加藤M	和田Y	須藤T	平山
沖縄／宮古	蘇畑	喜屋武	岩崎	代田
米国／カナダ			キャンプ	

当番表の石川／福井の項目で、担当者名の横に記入した数字は福音集会の開催日です(日曜に会場を確保できず、前日の土曜に開くものです)。

変更があり次第、集会のホームページhttp://www.christ-shukai.net/の日曜福音集会メッセージ当番表は変更箇所を更新されます。
最新データはホームページをご覧ください。

祈り会 (木曜日7:30PM~)	**6**／3	10	17	24	**7**／1	8	15	22
	芳竹	牧野	佐山	山本	野田	藤原N	小野沢	青柳
	詩篇 5	詩篇 6	詩篇 7	詩篇 8	詩篇 9.1-11	詩篇 9.12-21	詩篇 10	詩篇 11

29	**8**／5	12	19	26	**9**／2	9	16	23	30
重田H	清水Y	小島	岩下	杉本	芳竹	牧野	佐山	山本	重田S
詩篇 12	詩篇 13	詩篇 14	詩篇 15	詩篇 16	詩篇 17	詩篇 18.1-20	詩篇 18.21-30	詩篇 18.31-40	詩篇 18.41-51

2004年 よろこびの集い

1 January
12月31日－2日　御代田(1日:コンサート)
10日－11日　沖縄
17日－18日　熊本
31日－ 1日　グアム

2 February
7日－ 8日　名古屋
14日－17日　バンコク
21日－22日　神戸
28日－29日　仙台

3 March
6日－ 7日　大洗
13日－14日　別府
18日－23日　バンクーバー
27日－28日　高知

4 April
3日－ 4日　大阪
9日－11日　御代田
17日－18日　沖縄
24日－25日　宮崎

5 May
1日－ 3日　御代田
8日－ 9日　札幌
15日－16日　富山
22日－23日　福岡
29日－30日　宇部

6 June
8日－15日　ドイツ(ミヘルスベルグ)
16日－23日　ドイツ(ミヘルスベルグ)

7 July
3日－ 4日　盛岡
10日－11日　金沢
16日－18日　御代田
23日－25日　御代田
30日－8月1日　御代田

8 August
6日－ 8日　御代田
13日－15日　御代田
20日－22日　御代田

9 September
1日－ 9日　ドイツ(フィリンゲン)
16日－21日　ロサンゼルス
24日－26日　御代田

10 October
2日－ 3日　青森
8日－10日　御代田
16日－17日　島根
31日－31日　松山

11 November
6日－ 7日　新潟
13日－14日　沖縄
20日－23日　バンコク
27日－28日　福島

12 December
4日－ 5日　近江八幡
11日－12日　徳島
25日　メサイヤコンサート(東京)
31日－1月2日　御代田(1日:コンサート)

よろこびの集いには、日曜日の朝を有意義な時間の30分間にしましょう!

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト(ローマ字の氏名も加えて)を
事前にgotthold_beck@hotmail.com(ベックさん)までEメールで送ってください。
※Eメールが使えない場合は速達で郵送してください。

Information Box
[インフォメーション・ボックス]



ハイドンの「天地創造」8月に全曲演奏

キリスト集会有志の混声合唱団・管弦楽団は目下、ハイドン作曲「天地創造」の全曲演奏を目指して練習に励んでいます。3月27、28両日には、そのための合宿練習を御代田の国際福音センターで行ない、5月2日の「よろこびへのコンサート」では、いくつかの曲を抜粋して演奏しました。全曲演奏は8月8日に同センターで行なわれます。

この曲は、聖書の創世記に基づいてつくられた全35曲のオラトリオ。晩年のハイドンが1796年から98年にかけて全力を注ぎ、完成した大作です。1部と2部で神の6日間にわたる創造の御業を、3部で楽園におけるアダムとエバの生活をそれぞれ描き、主を賛美する大合唱で締めくくっています。楽譜は1800年2月、前例のない2ヶ国語(ドイツ語と英語)で出版され、たちまちヨーロッパ中で大成功を収めたそうです。

御代田に「シオンの家」



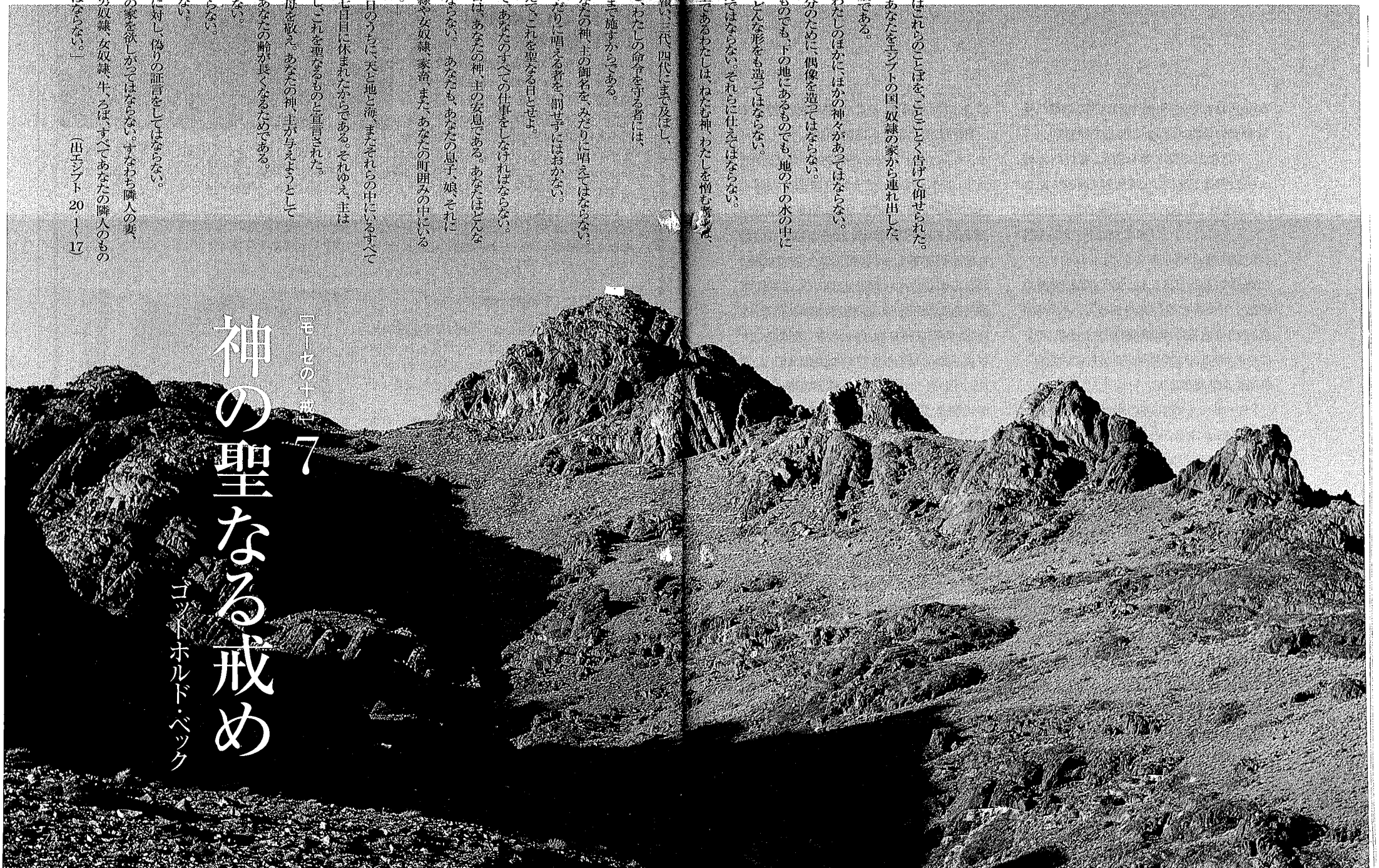
西軽井沢国際福音センターの近くに2004年4月、ユニークな施設が誕生しました。平井正彦、和子ご夫妻が運営する「シオンの家」。お年寄りの通所介護(デイサービス)と託児所を合わせたような施設です。

平井さんご夫妻は、キリスト集会が吉祥寺で発足したころから集っている方ですが、10年前に御代田に移住し、当初は「知的障害者との共同生活をしたい」と望んでいたそうです。そして、その思いは長い間、閉ざされていましたが、「昨年12月、主から一方的に建物が与えられた」(正彦さん)ことで、新しい道が開かれました。「シオンの家」は平井さん宅の隣、福音センターから歩いて10分ほどのところにあります。正彦さんは「県の認可が下り次第、始めたい。そして、みこころなら、前から考えていた知的障害者のグループホームも、と思っています。この施設が地域の方々との交流の場になれば感謝です」と言っています。4月8日には、ベックさんご夫妻や地元の町会議員、キリスト集会の方々など50人余が集って、「シオンの家」開所式が行なわれました。

祝福された台湾家庭集会

台湾の家庭集会が3月13日、台中の小田道夫さん宅で開かれました。小田さんの家では毎日曜日、小田さんのほか小田切達郎さん、古田黄さん、葉涼麟さんの男性4人で礼拝を続けています。しかし、この日は約30人が集う空前の盛会になりました。参加者は4人のほか、娘さんの高校進学のため帰国した敦子夫人ら小田さんのご家族はじめ、黄さんのご両親の古田公人、道子夫妻、故廖昭雄さんの妻、山本孝子さん、妹のグレース・リンさん、ご子息が台湾勤務の田辺澄子さん、ご主人が台湾勤務の小澤君江さんなど……。初めて集会に来られた人も、小田さんやグレースさんのお友だちなど10人近くいました。集会では「聖書のメッセージ」と「証し」がそれぞれ二人の方から語られ、さらに食卓を囲んでの交わりが持たれました。また、集会とは別に、廖さんの台湾時代のお友達と交流する機会が台北で与えられました。なお台中で日曜礼拝を守っている4人のうち、地元出身は葉さんだけ。他の3人は日本に帰国ないしは帰国の予定です。

1それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、
あなたの神、主である。
3あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。
上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中に
あるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。
あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、
父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、
恵みを千代にまで施すからである。
7あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。
主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな
仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子、娘、それに
あなたの男奴隷、女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる
在留異国人も。
11それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべて
のものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は
安息日を祝福して、これを聖なるものと宣言された。
12あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとして
おられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13殺してはならない。
14姦淫してはならない。
15盗んではならない。
16あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、
あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のもの
を、欲しがってはならない。」
（出エジプト 20：1～17）



「モーセの十戒」7

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック



今日は、「モーセの十戒」の内の第5番目の戒めをごいっしょに学んでいきましょう。

「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。」

（出エジプト　20・12）

聖書のみことばには、特別に貴い価値があり、ひときわ強い光を放っている「神の宝石」とでも言うべき箇所があります。そしてその「みことばの宝石」は決して古びず、永遠に輝き続けます。

「モーセの十戒」、神の聖なるみこころを反映する十のみことばは、そのような「神の宝石」です。十戒は何世代にもわたり、変わることのない十の光を持ち続けています。それは決して古くならず、神の永遠のいのちの息吹を吹きこまれています。ですから主は、自分の民であるイスラエルが常に戒めのみことばを忠実に守ることを強く要求なさったのです。

私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。これをしるしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい。これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。

（申命記　6・6～9）

これらのみことばは、私たちのうちに深く刻み込まれています。それらは私たちの前にある石の板とか、物の上にだけではなく、私たちの心の中に刻み込まれているのです。誰でもこれらの神の戒めを知っています。まことの神を信じる者にとって、次のみことばは、まさにぴたりと当てはまります。

「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。」

（エレミヤ　31・33）

主なる神の戒めに関わる問題は、「まことの神を愛するか、愛さないか」という問題です。もしも神を愛するならば、神を喜ばせたいと思い、また神の言われることをすべて守りたいと思うはずです。今まで見てきたように、第一の戒めから第四の戒めまでは、主なる神と自分との個人的な関係が中心でした。しかし、第五の戒めからは、自分と周囲の関係が中心になります。つまり、私たちは周囲の人々に対して、どのように振舞い行動するかという問題です。

したがって、第五番目の戒めから始まる神の戒めは、第一から第四までの戒めより、私たち人間にとってわかりやすいものとなっています。私たちの日常生活、目に見えるもの、試練、決断など、誰でもよく知っている事柄が問題となっているからです。これらの戒めの正しさは、誰一人反論する余地のないものであり、戒めを破った人々にも、反論できないほど明らかなものだからです。第五から第十までの戒めは、どの国においても何らかの形で憲法の土台となっています。これらの戒めが無視されると、家族においても、国家においても、人間が共同生活をおくることは不可能となり、人類は没落してしまいます。今日私たちは、確かに神の戒めを無視することが死を意味することを見ていますし、主が第五の戒めに続いて付け加えられることもよく理解することができます。主が付け加えられたのは、「あなたの齢が長くなるため」ということです。主なる神の戒めを守ることは、個人個人にとって、また人間共同生活にとって、民族にとって、「いのち」を意味します。この不動の原則は次の通りです。

「あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守りなさい。それを行なう人は、それによって生きる。わたしは主である。」　（レビ記　18・5）

これは、あなたがたにとって、むなしいことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ。　（申命記　32・47）

主なる神は、十戒の中の第五の戒めから始まる掟を、ひとつの掟にまとめておられます。

「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。」　（レビ記　19・18）

心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

（申命記　6・5）

主イエス様もまた、この戒めをもっとも大切な戒めとして次のように言われました。

「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」　（マタイ　22・36～40）

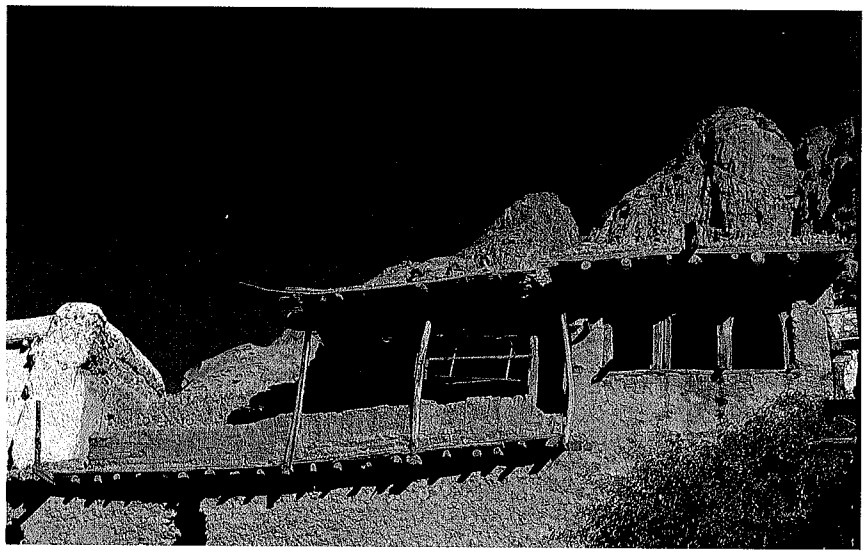
したがって上に述べた二つの戒めのあいだには、きわめて密接な関係があります。

「私たちと神との関係」、そして「私たちと他の人々との関係」。この二つは、内面的に関連しています。

したがって次のように言うことができます。主なる神を愛する者は隣人をも愛します。そして主を愛すれば愛するほど、いっそう隣人を愛するようになります。逆のことも言えます。隣人を愛することができなければ、神をも愛することができません。したがって私たちの隣人に対する関係は、私たちと神との関係を、この地上で公に表わすことになります。ヨハネが次のように言うとき、それは私たちに厳しい事実を示しています。

神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。(1ヨハネ　4･20、21)

もしも、他の人々との関係が正しくないなら、私たちはまず、神との関係を正しく整えなければなりません。そうすれば、他の人々との関係も変わるはずです。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」と主なる神は私たちに要求しておられます。



しかし、私たち人間の「生まれつきの性質」は、「自分自身だけを大切にせよ。」です。現代人は自分だけを大切にしようとし、その結果、孤独になり、不幸になり、いろいろな問題を引き起こし、あらゆる摩擦や戦争の原因になります。主イエス様の性質は、それらとはまったく違うものです。

「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」　(ヨハネ　15･13)

誰にも迷惑をかけなかったからとしても、神の戒めを守ったことにはなりません。他の人をほんの少し愛したとしても、神の戒めを守ったことにはなりません。誰かを憎んでいないというだけでは、決して十分とは言えず、もっと積極的に他の人を愛するように、と主は要求しておられるのです。

私たちが犯した罪よりも怠慢の罪の方がはるかに大きな負いめではないでしょうか。ここでよく考えていただきたいのは、私たちの家族に対する「愛の怠慢という罪」のことです。あなたの夫、妻、子どもは、あなたの愛を十分に得ているでしょうか。また、あなたの従業員や部下に対する愛の怠慢もないでしょうか。あなたの従業員や部下が、あなたに愛を求めたにもかかわらず、得られなかったというようなことはないでしょうか。彼らは働くための理性と知恵を持っているだけではなく、愛される心をも持っているのです。

また、滅びゆく多くのたましいに対しての愛の怠慢は、なかったでしょうか。しばしば私たちはあきらめたり、腹を立てたりしてしまうようなことがなかったでしょうか。もし私たちがもっと愛することができたなら、その人たちの心は開いたことでしょう。

また、苦しんでいる人、悩んでいる人、絶望している人、弱い人、まちがった道に入ってしまった人たちに対して、私たちはあまりにも早く判断を下してしまい、ほんとうの愛はひとつもなかったのではないでしょうか。このような愛の怠慢が主の前にすべて明らかにされるなら、私たちはただ主の前に恥じ入るばかりです。

主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましょう。　(詩篇　130･3)

前に述べたように、第五の戒めは人と人の関係にかかわる最初の戒めです。そして、その戒めは、まず親子の関係について語られています。両親は子どもにとって、まず最初に目に入ってくる存在であり、親子は、生涯にわたって特に縁の深い関係にあり



ます。

私たちは人生を、両親によって与えられています。ですから、親に対する愛は、他の人に対する愛よりも大切にされなければなりません。両親は子どもにとって神に次ぐ存在です。主なる神が人間のために、何をしてあげたいと思っておられるかは、親が子に対して何をしてあげたいか、を知ることによってよくわかります。

両親は幼子にとってすべてのすべてです。親は子どものために全責任を負い、心配し、導き、守り、必要なものをすべて与えます。両親を大切にすることは、つまりは主なる神を大切にすることです。

親の立場は、その親の道徳的な価値には関係なく、神によって聖別されています。親である以上、父と母とを「敬う」べきです。これは神の動かすことのできない戒めです。

この戒めには、年齢の制限がありません。この戒めは親が生きている限り当てはまります。現在のヨーロッパで悲劇的なことは、子どもが20歳になると、親の言うことを聞かず、自分勝手なことをすることです。この「敬う」ということは言葉と行ないで「敬う」ことです。もちろん「敬う」といっても、子どもの年齢に応じて、いろいろな違った敬い方があります。未成年の子どもは、絶対服従という形で両親を敬います。それは神の聖なるみこころであり、神の教育の土台です。

わが子よ。あなたの父の訓戒に聞き従え。あなたの母の教えを捨ててはならない。それらは、あなたの頭の麗しい花輪、あなたの首飾りである。

(箴言　1・8、9)

子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。　(コロサイ　3・20)

旧約時代には、わがままで不従順な息子は死刑に処せられました。

かたくなで、逆らう子がおり、父の言うことも、母の言うことも聞かず、父母に懲らしめられても、父母に従わないときは、その父と母は、彼を捕え、町の門にいる町の長老たちのところへその子を連れて行き、町の長老たちに、「私たちのこの息子は、かたくなで、逆らいます。私たちの言うことを聞きません。放蕩して、大酒飲みです。」と言いなさい。町の人はみな、彼を石で打ちなさい。彼は死ななければならない。あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。イスラエルがみな、聞いて恐れるために。

(申命記　21・18～21)

自分の父をあざけり、母への従順をさげすむ目は、谷の烏にえぐりとられ、わしの子に食われる。　(箴言　30・17)

神のみことばである聖書は、両親と教育者のうえになんという大きな責任を置いていることでしょう。未成年の子どもは親に対して絶対服従を要求されるように、親たちもまた、この戒めを守らせることを義務づけられています。

主イエスはこの地上に幼子としてお生まれになりました。主イエス様は生涯この第五の戒めを守られ、父と母とを敬まわれました。

それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。　(ルカ　2・51)

今日私たちはそのような考え方からどれほど遠ざかってしまったことでしょうか。現代社会では子どもの教育に関して、「絶対服従を子どもに要求することは、子どもの自由を束縛することだ」とみなされています。このような教育の結果、今日の親は、「子どもに従う」ようになってしまっています。

また、子どもたちは、健全な発育のための土台が欠けているので、肉体的にも精神的にも病気になってしまっています。今日精神病院には、驚くほどの多くの若者が入院しています。彼らは人生に挫折してしまっています。その多くの原因は、両親に対する服従の態度が欠けていたことに端を発しています。両親に対する服従がなくなっていくということは、末の世の特徴です。

終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者になり…。　(2テモテ　3・1、2)

現代の人々は、主なる神の戒めからどれほど離れてしまっていることでしょうか。人間が神の聖なるみこころを軽く考えたため、若者たちは堕落してしまったのです。従順こそ未成年の子どもにふさわしいものです。大人になった子どもは、自分自身で決断することを学ばなければなりません。しかし両親を敬うという戒めからは解放されていません。成長した子どもは、尊敬と愛に満ちた配慮によって、両親を敬うべきです。

年老いた父親に対する親孝行ほど美しいものはありません。弱って体が不自由になった母親に対する娘の配慮ほど美しいものはありません。それによって与えられる



祝福は、地上のいかなるものよりも尊いものです。

主イエス様は、パリサイ人たちが自分勝手につくった人間的な掟とは異なり、両親に対する配慮こそ主に対するささげ物に勝るということを強調しました。

「モーセは、『あなたの父と母を敬え。』また『父や母をののしる者は、死刑に処せられる。』と言っています。それなのに、あなたがたは、もし人が父や母に向かって、私からあなたのために上げられる物は、コルバン（すなわち、ささげ物）になりました、と言えば、その人には、父や母のために、もはや何もさせないようにしています。」（マルコ　7・10～12）

大人になられた主イエス様は、母親を常に思い、模範的に取り扱われました。十字架につかれた最後の時にも、主イエス様は母親を愛し、弟子のヨハネに母親の将来のことを頼みました。

イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます。」と言われた。それからその弟子に「そこに、あなたの母がいます。」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。（ヨハネ　19・26、27）

今日、何という多くの問題が家庭の中にあることでしょうか。男の子は父親の権威に逆らい、女の子は家のことを顧みず、てんでに自分勝手な道に走っています。今日の若者の特徴は、親に対して、愛も尊敬もなく、悪口を言うことです。

何と多くの母親が心を傷つけられ、何と多くの父親は息子や娘に絶望していることでしょう。何と多くの親が子どものために苦しい涙を流していることでしょうか。

この第五の戒めには、当然ながら義理の両親も含まれています。「あなたは義理の父、および母を敬いなさい」と。この戒めを守るなら、多くの家族は変えられることでしょう。

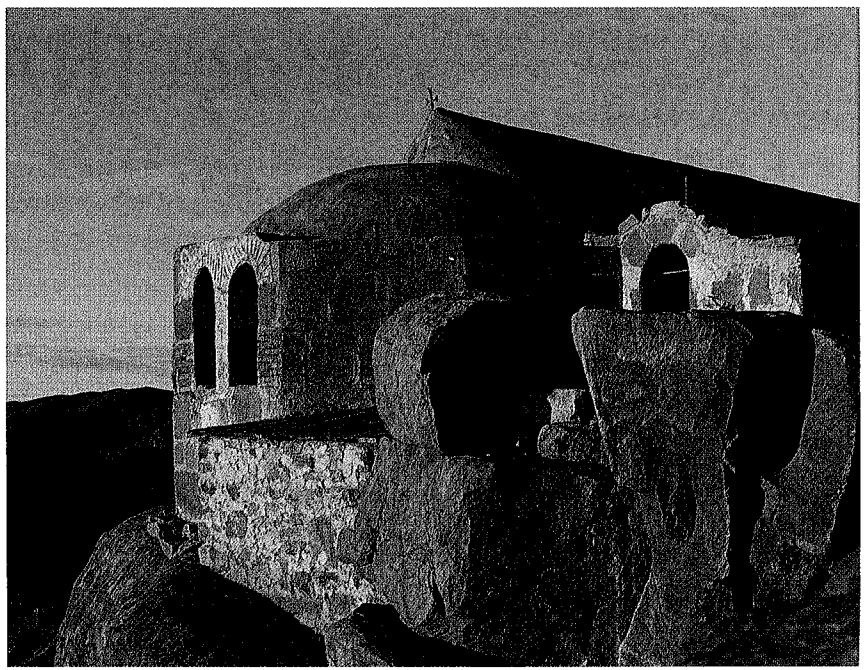
もしかするとあなたは、自分の父親が尊敬に値しない、また自分の母親が愛するに値しない、と言わざるをえない状況に置かれているかもしれません。しかしそうだとしても、「あなたの父と母を敬え。」という神の戒めから解放されることはありません。

両親がたとえどのような人であっても、神に代わるものである以上、ただそれゆえに、あなたは父と母を敬わなければなりません。両親を敬う者は神を敬います。あなたは両親がどのような状態にあったとしても、主のゆえに、敬い愛しなさい。

聖なる神のみこころを行なうために、両親を敬いましょう。主は両親が導かれ、祝福されるために、あなたを用いられるかもしれません。何と多くの両親は子どもを通して永遠の救いにあずかるようになったことでしょうか。

あなたには、まだ両親がいらっしゃるでしょうか。ご両親はあなたを見て、喜んでおられるでしょうか。あなたのことを思うと両親の目は輝くでしょうか。あるいはあなたのことを思って涙を流すでしょうか。

愛すれば愛するほど、両親の年月はさらに豊かなすばらしいものになります。多くの人は両親が死んでから、どうしてもっと多くのことをしてあげなかったのかと後悔します。「自分自身と同じように父と母を愛せよ。」これこそ、すべての人に向けられた神の戒めです。





こちら伊那集会で～す from INA

皆さま、こんにちは。伊那集会の紹介をさせていただきます。

当地(長野県伊那市)にキリスト集会が産声をあげたのは15年前ごろです。宮城昭代さんを通して開かれた家庭集会が始まりでした。以来、毎月ベックさんが来られ、その頃は昼夜の2回、イエス様の福音が伝えられました。ベックさんと共に多くの吉祥寺集会の方々が参加され、主の恵みの数々を証ししてくださったことも、ありがたい思い出です。

それから2年ほどして礼拝がイギリス人宣教師、ターナーさんの家で毎週、持たれるようになりました。礼拝の場所は数年後、伊那の公民館へ移り、聖書のみことばを取り次ぐメッセンジャーの方も定期的に来てくださるようになりました。現在は伊那と岡谷の2箇所の公共施設を借りて、交替で日曜日ごとに礼拝と福音集会が持たれています。この間、集う人数も増えて、多くの方が主の前に重荷を下ろすことができ、安らぎを得ました。

家庭集会の会場は草創期からずっと、東京の内田温子さんの別荘を使わせていただいていますが、ここでは多くの方が福音に初めて触れ、語り合いの時を持っています。

同じ県内に西軽井沢国際福音センター（長野県御代田町）があるため、年に10回ほど福音センターで開かれる「よろこびの集い」に参加しやすいことも、私たちがいただいている恵みです。

恵みと言えば、先に天に召された方々から受けた恵みも思い出されます。その方々の信仰の結末、特に召される直前の祈りが今も胸に焼きついています。それは次のような祈りでした。「イエス様、あなたのことを心から信頼していなかった私をお赦しください」「長い人生のすべてに主が関わってくださったことを改めて覚え、感謝します」……。

また私たち幼い群れは、葬儀や記念会で助けを必要とした時に、他の集会の方々から祈りと献身的な協力をいただきました。そうした周囲の助けによっても伊那集会は支えられ、今に至っています。

あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。（ピリピ　2･2）

わずか10数年の歳月ですが、こうして伊那集会の歩みを振り返ってみたとき、幼い群れに主が備えてくださった導きの数々に感謝し、主を賛美せずにいられません。

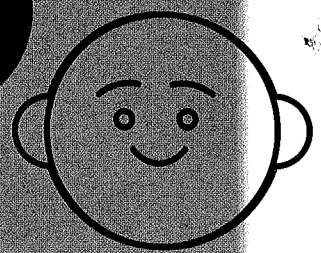
「あなたは、幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された。」（マタイ　21･16）

礼拝・福音集会	毎週日曜日午前10時30分から。会場は伊那西町公民館と
	岡谷あいとぴあ（1週ごとに交替で）
日曜学校	適宜、導きによって開く
家庭集会	内田温子さんの別荘
祈り会	毎週水曜日（伊那・岡谷会場、交替で）

（山田正博）

Cielo azul

あおぞらひろば



障害のある子どもたちの
学校に勤めている先生から、
うかがったお話です。

欠けることの　恵み

Pさんが出会った、その子の名前は、Yちゃん。
自閉症という障害を、神様からいただいた子どもでした。

第一印象は、
（なんて、きれいな目をした子だろう。）

人とのかかわりを、もちにくい傾向のあるYちゃんですが、ほんとうに澄みきった、すがすがしい笑顔で、目の前を走り回っていたそうです。

（外からの汚いものを、入れられない分、この子は、幸せそうに見えるのかなあ。）
そんな風に思ったそうです。

だめで　もともと

笑顔の素敵なYちゃんでしたが、ひと時もじっとしていません。Pさんにとっては、大変な毎日が始まりました。

ケガをしないように、また、どこかにいなくなってしまわないようにと、いつも目を光らせていなくてはなりません。

毎日が、へとへとでした。
仕事としてかかわっている自分でも、こんなに大変なのですから、ご家族は、毎日どんなに大変なことかと思いました。

ところが、ある日のこと、そのお母さんとお話する機会があり、お母さんが、クリスチャンだったことがわかったのです。
「『信じていれば、なんでも大丈夫』なんてわけじゃ、ぜんぜんないですよね！やっぱり、泣くし、絶望するし、落ち込むし、疲れるし…。『だめでもいいんだ。もともとできない者なんだ。』って、帰る原点があることが、支えなんです。」
お母さんは、率直におっしゃいました。

その姿は、（クリスチャンって、立派で、どんな試練のときにも、天国に目を向けて、喜んでいる人たちだ。）
という先入観をもっていたPさんにとって、新鮮なものでした。

傷ついていて、威張っていなくて、ちっぽけに見える、温かなお母さんのお話。
それは、Yちゃんと接することに、自信を失いかけていたPさんの目を開くものでした。

お互いさま　トンチンカン

「私も昔、教会に行ったことがあるんですけど、教会の人たちは、『主から受け取ればいいのよ。』とか、『いつも喜んでいなさい。』とか、正論ばかり。それが正しいってことは、わかるんだけど、苦しくなって…。」

Pさんは思わず、相手が保護者であることも忘れて、本音で話してしまったそうです。

すると、Yちゃんのお母さんは、こういう人たちのことを批判もせず、
「その人たちはその人たちで、先生のためを思って、一生懸命だったのかもしれませんね。私たちって、みんな、お互い勘違いだらけ。トンチンカンな歩みばかりする者だからね。」
と語ったのです。

その穏やかな様子に、感激したPさんが、
「お母さんは、もうだめだって思うようなこと、ありますか？」
とたずねると、
「もう、しょっちゅう。いっそのこと、Yと一緒に天国に行けたらって、毎日思ってる。ヒステリーだって起こしますよ～！

あおぞらひろば

本当の私を、一番良く知ってるのは、家族ですね。見捨てないでくれて、感謝というか…。」
と、恥ずかしそうに、笑われたそうです。

ともに　祈る

Yちゃんは障害ゆえに物事へのこだわりが強く、あるときは遊んだものを片付けたくない（もっと遊ぶ）といって、ひっくり返ったまま、1時間近く押し問答になったり、読みたかった本がないと言って、パニックを起こしたりするのですが、
「できなくて、当然。」
ということを知ったこの日から、Pさんの心は、大きく変わっていったそうです。

遠足の途中で、缶ジュースを買うと言って道端に大の字になられた時には、
「こんなところで寝ていたら、車にひかれちゃうよ。」
と説得するのをあきらめて、
「しゃーない、Yちゃん！お祈りしよう！」
と、一緒に路上に座って目を閉じると、言葉や知恵に遅れのあるYちゃんが、大きな声で、
「イエス様いた！ありがと！ありがとう！」
と叫びだして、周りの先生方から、ひどく叱られたそうです。（宗教を教育に持ち込まぬよう、また、路上で指導者が目をつぶるとは何事かと）

でも、幼いYちゃんなりの表現で、心をイエス様の前に注ぎだしているんだなあと思うと、Pさんの心は軽いのでした。
恥ずかしい思いは、少しもありませんでした。

福音の種

Yちゃんのお母さんを通して、Yちゃん自身を通しても、Pさんの心は、少しずつ、イエス様のもとへとつながれていきました。

世間からは、『障害のある子』や『その親』として、いろいろな視線にさらされるYちゃんたち家族が、Pさんの心にとって、小さな福音の種となったのです。

走れなくても　強くなくても
いつも　イエス様が　いてくださる
私たちは　ロバの子です
神様のために
神様のために
働きます
（子どものための賛美『ロバの子』より）









子どもたちの写真やエピソード、お待ちしてます!!

原稿募集　各地で日曜学校のお世話をされている方々、また子育て奮闘中の皆様からの原稿をお待ちしています。（子どものプライバシー保護の意味合いも含めて、基本的に執筆者、エピソード提供者の名前は載せません。）子どもたちの、ふとしたつぶやきから教えられたこと、ドキッとさせられたこと、思わず吹き出してしまうような、ユーモラスなエピソードなど、お寄せください。なお、紙面の都合上、編集して一部を掲載させていただくこと、全員分をご紹介できないこともありますが、ご了承ください。

送付先　181-0005　三鷹市中原3-1-55　清水洋一
e-mail :yoichimoyota@yahoo.co.jp



12/23
藤井 嘉也・結実子



Wedding 結婚式

主は私の力、私の盾
私の心は主に拠り頼み、
私は助けられた。それゆえ
私の心はこおどりして喜び、
私は歌をもって、主に感謝しよう。
（詩篇 28・7）

結婚式と葬儀のご報告







2003年
10/14 鈴木 裕之
11/04 島田 梅茂
11/12 中村 トシ
11/27 三浦 清
11/28 国越 和子
12/04 手塚 美絵子
12/08 遠藤 英津子
12/23 野嶋 満子
12/23 高橋 正一





Funeral 葬儀











わたしは、よみがえりです。
いのちです。
わたしを信じる者は、
死んでも生きるのです。
また、生きていてわたしを
信じる者は、決して
死ぬことがありません。
（ヨハネ 11:25、26）





2004年
01/13 牧 豊子
01/13 小松 久子
01/24 村上 妙子
02/08 大橋 与成
02/24 喜屋武 タケ
02/27 金城 結麻
03/08 海老根 晃
03/19 関 頼正

チョコレート ブラウニー

Chocolate Brownie

backen mit Bicky!
ビッキーのケーキづくり



作り方

《下準備》

a. チョコレートは湯煎のために、細かく切っておく
b. クルミを粗く刻んでおく
c. 卵を卵黄と卵白に分けておく
d. 小麦粉、ココア、ベーキングパウダーを合わせて振るっておく
e. オーブンを（180℃）予熱する



《生地を作る》

1. 生地に混ぜるチョコレート100ｇを50～60℃の湯煎で混ぜながら溶かしておく



2. 常温でやわらかくなったバターをクリーム状に泡立て器で練る



3. メレンゲ分を除いた残りの砂糖を数回に分け入れ良く混ぜる
ポイント この段階でふっくら白っぽくなるまで丁寧に混ぜる



4. 卵黄を２コくらいずつ入れて混ぜる



5. 1.で溶かしておいたチョコレートを入れて混ぜる



6. きざんだクルミを入れ混ぜる



7. ふるっておいた小麦粉とココアとベーキングパウダーを３～４回に分けて入れ混ぜる
ポイント だんだん生地が重たくなって写真のような状態になる



8. 別のボールにメレンゲを作る
卵白を 泡立て器で泡立て、途中白くなってきたら残しておいた砂糖大さじ２を入れ角が立つまで泡立てる



9. 7.の生地にメレンゲを２～３回に分けて入れ、さっくり混ぜる
ポイント 始めに入れるメレンゲで生地をゆるませ、後に入れるメレンゲはつぶさないように混ぜる



10. 生地をバター（マーガリン）をぬった型に流し入れ、180℃のオーブンで40分位焼く
ポイント 竹串を刺して生地が付いてこないことを確認



11. 焼き上がったら、少し冷めるまで待って型から出す



12. コーティング用のチョコレート80ｇを溶かしはけ（パレットナイフ）でのばす



材料

《すべて常温にしておく》

生地
- 小麦粉　100ｇ
- ベーキングパウダー　小さじ1
- バター（有塩で良い）100ｇ
- 卵　6個
- スイートチョコレート　100ｇ
  ……（市販の板チョコでも良い）
- ココア　大さじ2
- クルミ　100ｇ
- 砂糖　125ｇ……（内 大さじ2程度をメレンゲで使用）

他
- コーティング用
- スイートチョコレート　80ｇ
  ……（代りにパウダーシュガーをかけてもよい）

道具

ボール２個（生地用／メレンゲ用）
湯煎用の鍋やボール
ハンドミキサー
はけ（パレットナイフ）
ゴムべら（木べら）
型：20×20の「ブラウニー型」を使用

※ 29×29くらいの「天板」でもこの分量で大丈夫です。その場合は薄くなるので焼き時間も短くなります。

チョコレート ブラウニー

Chocolate Brownie

ブラウニーは、チョコレートの生地にナッツを加えて焼いた伝統的なアメリカのお菓子で、クッキーのようなものから濃厚なものまで色々あります。
このチョコレートブラウニーは、生地の口あたりがふんわりとしてコーティングのチョコレートも甘すぎず軽くて食べやすいレシピです。
一日おくと しっとりとして、冷やして食べると また ちがった味わいがあります。



チョコレートの原料はカカオ。古代の中南米では、カカオは疲労回復に優れた食品として用いられていました。それは、カカオ豆を焼いてすりつぶし、水やスパイスなどを加えたドロドロとした飲み物でした。16世紀の大航海時代にカカオはスペインに渡り、チョコレートドリンクから始まり、次第にヨーロッパ各地に広がり、食べるチョコレートが作られるようになりました。
チョコレートはカルシウム、マグネシウム、鉄、亜鉛などのミネラル類を豊富に含むバランス栄養食品です。また、最近注目されているポリフェノールを多く含みます。チョコレートに含まれるカカオ・ポリフェノールは、動脈にコレステロールがたまったり、LDL-コレステロールが酸化を受けて動脈硬化が進むのを防ぐことが確かめられています。そして、あの香ばしい香りにも、集中力や注意力、記憶力を上げる効果が確認されています。
チョコレートは太るからと敬遠しないで、少量を日々楽しんでみてはいかがでですか？